

嚴島圖會卷之三

長濱〔割註〕一名八重濱ともいふ。方五町の入江ありて沙濱潔白なり。この處にも櫻數株ありて花の

時觀賞すべし。是より聖崎までの間小なきり浦、大魚切浦、清水が浦、米が浦、屏風が浦等の名あり。

蛭子社

〔割註〕同所にあり、拜殿、鳥居あり。』

聖崎

〔割註〕三十間ばかりの洲嘴ありて風景の處なり。』

よものうみ浪しづかなる時にあひて聖がさきをけふ見つるかな 曼珠院法親王

蓬萊巖

聖崎をはなれて海水のうへにたてり。巖上に古松數株ありて海風にもまれ、容姿おのづから

造りなせるがごとし、世に畫がくなる蓬萊山といふものに似たり。故に名とす。また別に蓬萊と稱す

るものあり。三四月の頃、風恬かに波穩かなる時、此處より浮き出づ。その粧ひ金銀瑠璃を以て砂と

し、其上松栢生茂り、或は宮殿樓閣の象ありて其莊嚴たぐへん物なし。光明海上に彩きわたりて次

第に消滅す。いまま往々是を見る人あり。多くは丑日に現すといふ。その山縁を知らず、近世橋南

谿が著せる西遊記に、安藝國に壺樓ありといへるは、恐らくは是をいふなるべし。

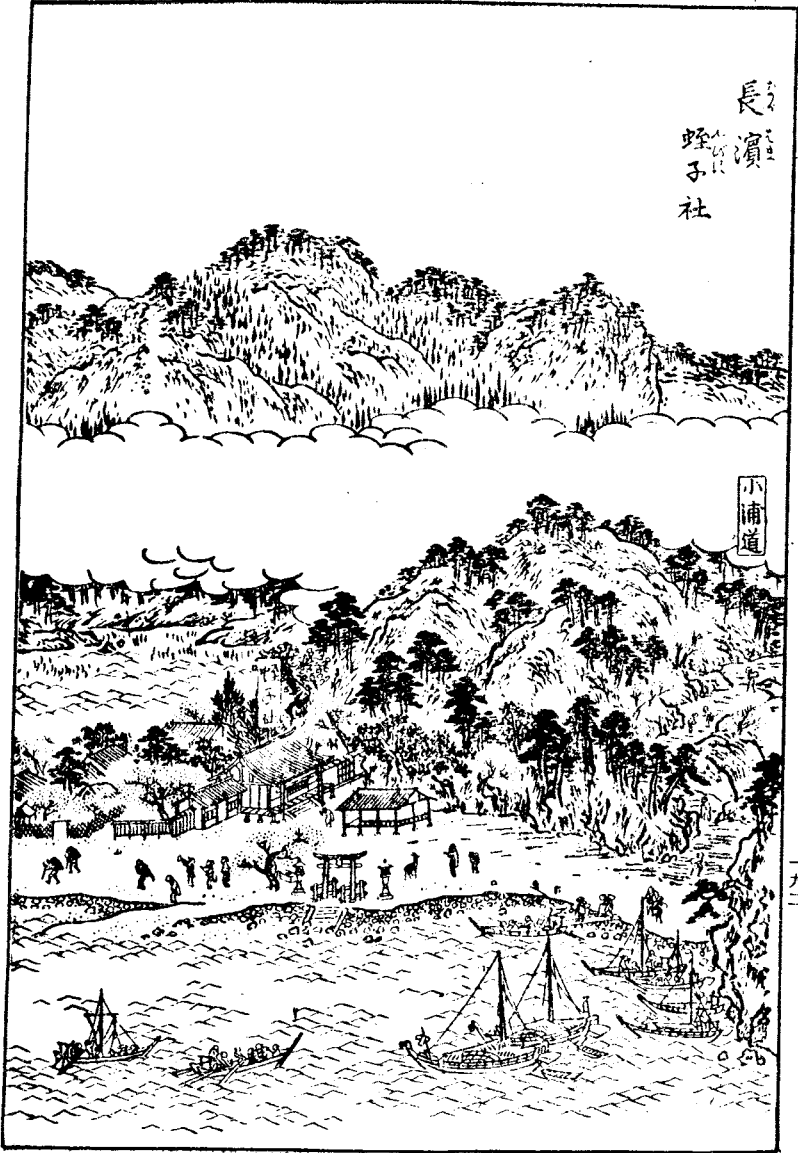
姥懷

〔割註〕入江あり、この處より島の東邊にして波穩かなり、よりにこの名あるなるべし。』

長濱

蛭子社

小浦道



題長濱荒夷社廟壁
 石川文山
 華表立庭高突兀堂如
 神廟室桑門禪心本是
 無他佛江上青山不動
 尊



江浦えのうら〔割註〕入江あり。〕

杉浦すぎのうら〔割註〕沙濱すはま五町餘ま松杉森々しょうしんくたり、一名相生の浦ともいふよしを傳ふ。〕

杉浦神社すぎのうら 祭神まつりかみ、底津少童命そこつちのこみこと 〔割註〕島巡しまめぐり第一の拜所はらじよ。〕

いく世をかすぎの浦かぜふく音も神さびにける此宮居かな

中納言持豊

金岡水きんがみづ 〔割註〕同浦より二町おくにあり。〕

この水清潔甘冽みぎせけつかんれつにして地海ちうみにちかけれども、絶たえて鹹氣かんきなし。傳つたへいふ、佐伯郡甘日市の洞雲寺金岡和尚しやうごん此處こゝに座禪ざぜんせられしことあり。その時はじめて涌出ゆうしゆつしたりとぞ。彼寺かのてらにもとより金岡水といふ名水ありて、此水と水脉相通すゐみやくあひつうぜるよし、もしくは權者修行ごんじやしゆぎやうの感應かんごうによれる歟。

櫻川さくらがは 〔割註〕櫻の木おほし。〕

火戻口ひもどくち 〔割註〕むかし島巡しまめぐりの船中せんちゆうに清火せいひせざりし者ありしが、爰こゝにいたりて船ふねすゝまず、故ゆゑにこの名

ありといふ。〕

包浦つみのうら 〔割註〕沙濱すはま三町あり。〕

此浦このうらは明神降臨みんがじんかうりんのむかし、平暴ひらつゆみをくだし置たまひしによりて、磯いそにある石ことごとく累つゞみの形かたちになれりければ、つゝみの浦と名づくるよし。陰徳いんとく太平記たいへいぎに見えたり、七浦の外なり。

包浦神社 祭神まつりかみ鹽土翁しほつちのおぢ

太古は、神武天皇西偏よりおこりて天下を平定したまひしとき、鹽土翁帷幕の軍議に参りたまへり。弘治元年毛利元就の陶全美を討れしとき此浦に上り、博奕尾を経て軍終に利を得られしかば、後に社壇を改め建て、社領許多を附られたりとぞ。按ふに、この神の義兵をたすけて非道を誅したまふこと、歴史の載るところ顯然たり。士たる者はかならず詣つべきことなり。〔割註〕包の名義、陰徳太平記の説おそらくはあやまりならん。今詳かに知がたしといへども、祭神の名相近し。しほつちの訛つゝみとなれるにはあらじや。

猷浦〔割註〕沙濱一町。〕

千猷岩〔割註〕同浦にあり、平面の岩にして長さ五間。或云、千口の義にして、石面千口の魚を列ぶ

べし、蓋し漁人の言よりいでたるならん。〕

鷹巢浦

鷹巢浦神社 祭神底筒男命〔割註〕島巡第二の拜所。〕

ときは木のかげもたか巢の浦浪をかけてはれたる神の廣前

中納言持豊

上居濱〔割註〕沙濱五町、方二町の池あり、水禽多し。〕

下居濱〔割註〕沙濱三町。〕

腰細浦〔割註〕沙濱三町、入江あり。〕

聖崎 ひりさき

自官島還草津

舟中

茶山

揭起孤蓬時指顧

仙山只在雲深處

江天乍雨渺茫中

短艇嘔啞駛掉去





巖島海上は浮ぶ

ところの遊樂場

そのハ海氣のむき

がれて種々の姿

態をなすといふ也

所謂浮氣樓とい

趣を用いて其

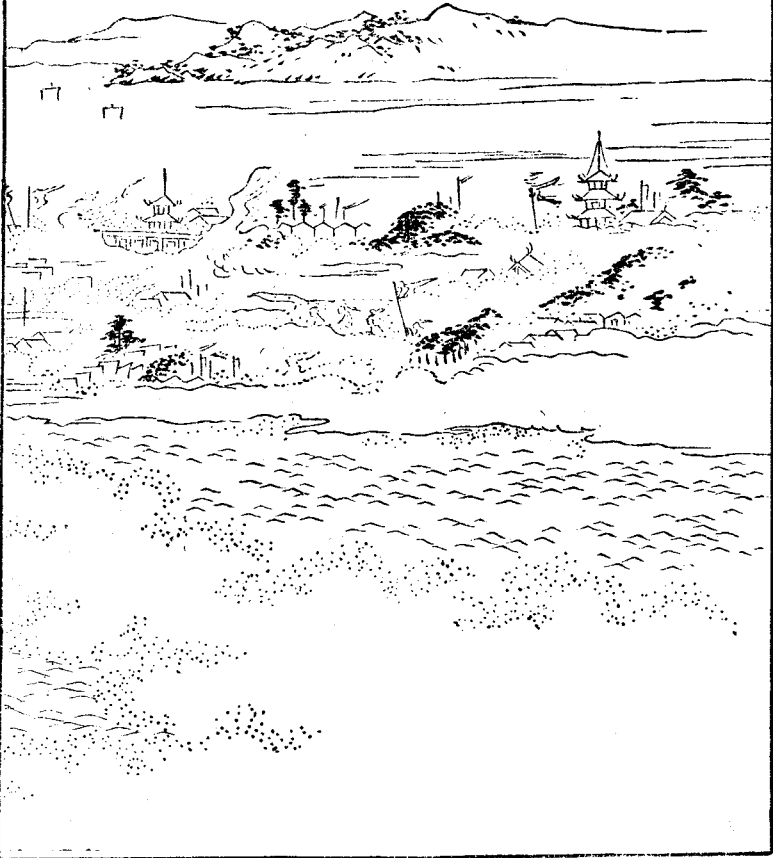
實ハ思なるもの

屋ハ蛟龍の窟

といゆる小洋

にあらざるも

遊樂場あり



巖島四邊の海

底はこれゆ金

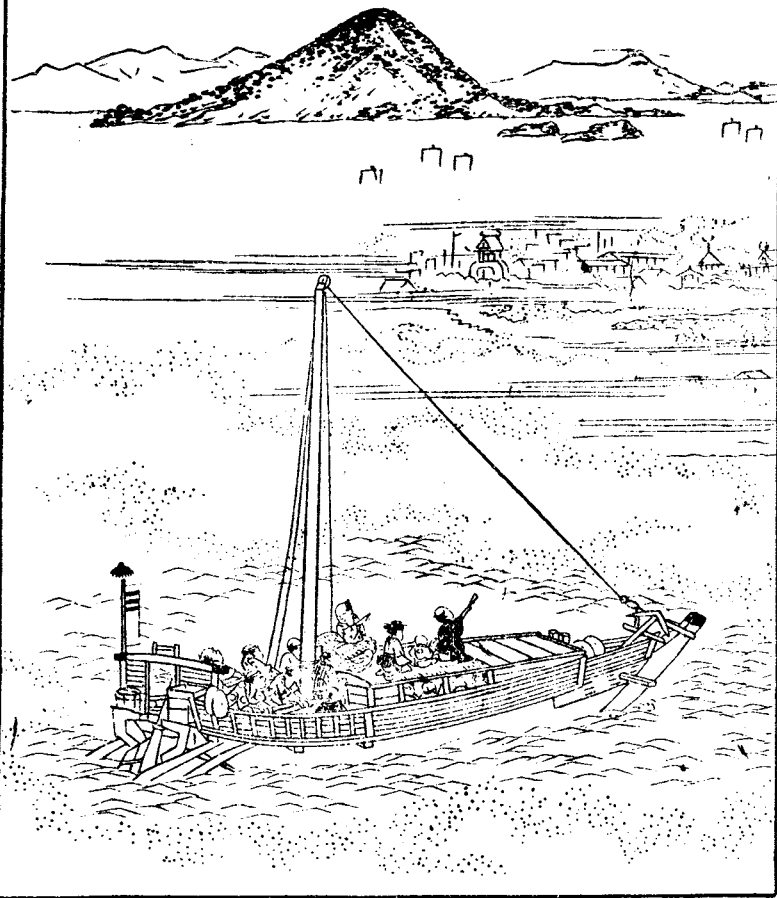
くし其金其の

費事とてとらふ

精英の氣さる

ことりも

あんりー



島廻茅輪の番しまめぐりちのり

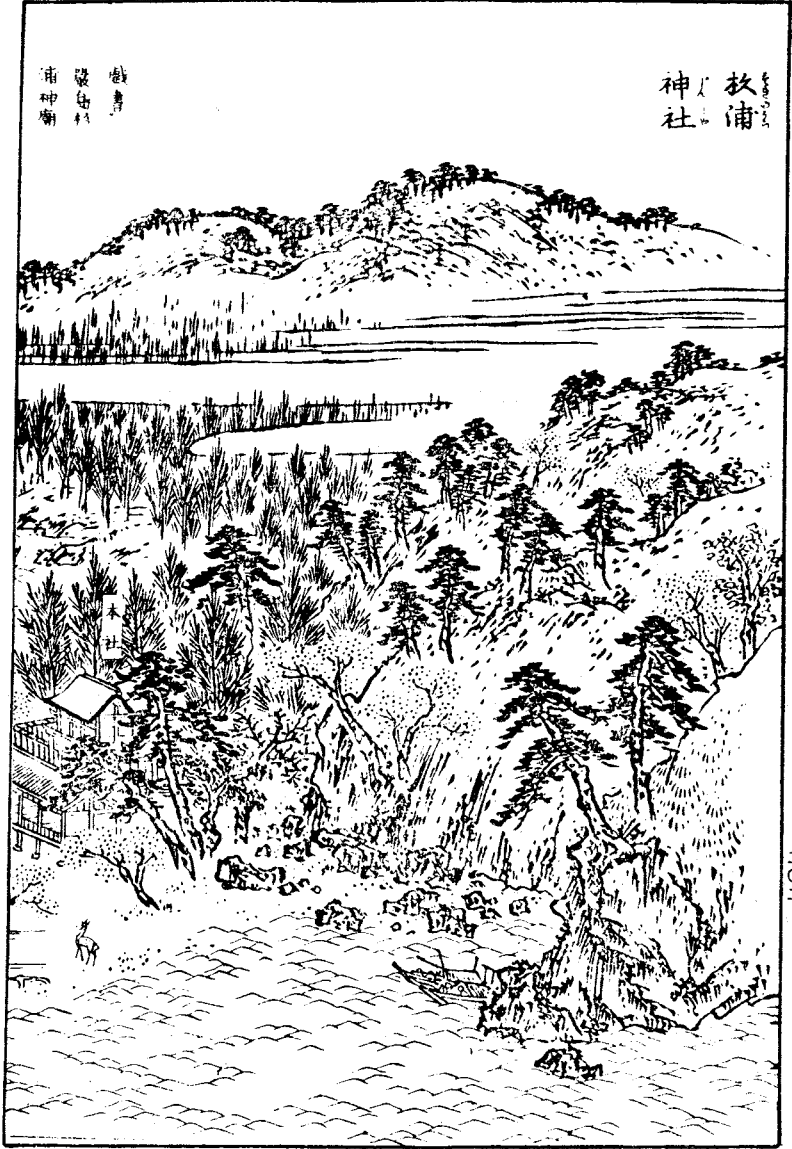
島廻茅輪





救浦神社

戲身
巖崎村
浦神廟



壁

石川大山

今茲愛西李

夏神旬伊那

高李祀之屋擊

舟登助伏世間

津、礪石神子騰

辨在黃地曰叔

浦廟言支唯直

得日敬如在如

裡樹亦取水薦

周崖、歲於松怪石

淨泉樹根暫休

廟、又甘每覆

栢洋批個離世

出塵、食網魚鮮

愛野鹿、則一遊

寮、鼓地、吟、河、雷

一、江、湖、壯、人、散

人、謂、誰、母、為、多、蟻



包浦神社

七浦風烟隨棹移

神鴉飛處羽差

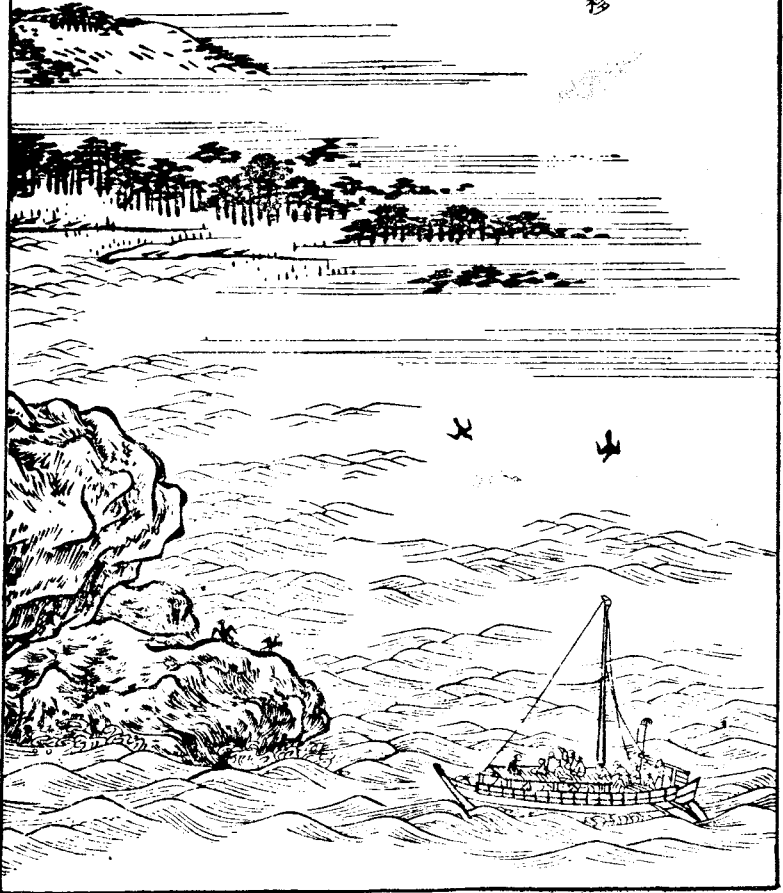
也怪巖奇石

麗如畫々

裏秋光盡

上詩

臨川





腰細浦神社

〔割註〕島巡第三の社。

伊豫松

〔割註〕同浦にあり、高さ五六丈。傳へいふ、昔伊豫の人此浦にて稚松を取かへり、盆栽してもてあそびしに、たちまち祟ありしかば此處にかへしうゑたりとぞ。

楷木浦

〔割註〕濱三町。 汐みてばなみもいはほをこし細の浦ふくかぜやはげしかるらん 中納言持豊

藤浦

〔割註〕濱二町、藤多し。

比目魚崎

〔割註〕鰈石あるを以ての名なり。

比目魚石

〔割註〕形似たるを以て名づく。

山伏返

〔割註〕島巡の時慢心に長ぜる族ある時は舟に怪あり、今この名あるも故あるべし。

青海苔浦

〔割註〕沙濱二町。

青海苔浦神社

〔割註〕同浦にあり。 祭神猿田彦大神

牛王社

〔割註〕同浦にあり。 祭神猿田彦大神

陶全姜敗死所

〔割註〕青海苔の浦よりおく山に在ること十三町ばかり、高安が原といへる地なり。 かげひたす木々のみどりも青海苔の浦の名しるき波のおもかな 中納言持豊

全姜毛利氏の爲に破られて爰に遁れ來り、終に自殺せり。

陰徳太平記に曰く、入道は肥太りたる人なれば行歩心に任せずあゆみ勞れ、暫しとある處の石上に腰うち懸て休まれける時（中略）柿並佐渡守はや日も午に下り候、今日此山中に紛忍びて御座候へ、磯邊に槎の泛て候なる。夜に入候なば、此木に全姜公を載申し、山崎殿我等究竟の水練にて候間、腰に綱を付け更遊ぎ更休みて此木を漕ぎ、あれなる阿太多島か小黒髪かまで逃退き、其邊の漁舟どもに乗せ申て防州へ歸るべく、槎にのりて天河へさへ至りつれば、ましてや阿太々島までは何より易き事にて候といひければ、入道聞て佐渡勘解由が水練は吾兼て知る所なり。吾もまた富田川に幼少の頃水戯して、海河に自由を得ること海神漁士にも勝るべし。遊ぎ渡りて命生んとおもはゞ、面々の力を不借、あれなる島まで渡らんは最やすきことなるべし。熟事の様を按ずるに、此度不意の戰に負しこと、是吾戰の拙にあらず。われ主君を弑せし八逆罪に、當島の大明神冥罰を加へらるゝ所なり。然る上は逆も遁れぬ此身の死すべき途を出、海上などにて敵船にあひ、止々と討れんこと、一身の恥辱のみか、先祖の面伏、子孫の名折なり。そのうへ防長豊筑の士卒三萬人を帥て渡り、一人も生て歸る者なき形状にしなし、入道一人立かへりて死たらん者の父子兄弟に何の面目ありて面を對くべきや。只自害せんより外更に思ひ設けたる事こそなけれ、といはれければ、聞人感稱の涙を流せり。牟羅漢、謝仲初が術を得ましかば、水面に笠を措き、竹葉に乗て江上をも濟るべし。黃道眞王子喬が道を不學ば、樹陰に彳む鹿、雲間に翔る鶴に駕する事もあたはざる故、諸人中々二途にこゝろざらず、

鷹巣浦
神社

陸一茶て

ひなもまむ

てし

とうの名の

あさくは

と浦の

松き

こまのり

清水
調え





腰細浦神社

腰細浦





青海苔浦

神社乃圖

島廻の時この取
 まて養腹の青海
 苔採用あらず古
 例なりこれより
 て浦の名をつけ
 てもよとあそくよ
 り此名はくさつ經
 好子の若のねもひ
 ちせて青海苔の
 養をもはへし
 三や





面々只深く自害して、中有九重の泉路までも供奉の忠を建べきと、心の申ひかに涼しからんとぞ見えにける。かくて入道は石上に苔を拂て座し、乙若が頸に掛たりける袋より胡餅を取出し、自らも喰ひ、山崎柿並等にも與へられけるが、さて面々腰に何にても付けざるや、また水呑は持ざるや、最後の杯すべきをと有けれども、不意を討れし合戦なれば、誰一人としてかゝる用意したる者もなかりけり。其時民部少輔葉廣柏の落たるを拾ひ、松の葉を以て二三枚閉重ね、平手の形に作り、谷川の水を汲て酒と號け莞爾と笑て。いかに面々聞給へ、後漢の道丙は故人に遇ごとくに水を酌て酒となせば、人みな酔ことを得たりとかや、是はそれにはひきかへて、一盃呑ではかなき浮世の酔を醒すは功德水とや申べき。されば昨日は谷の流を汲で彭祖が菊の水になぞらへ、千代もと祈りし君が齡、今はまた曹源一滴の水に比し、手に掬して即身即佛ならしめたまへと、願ふ事のかなしさよと、涙にくれて立けるが、いで最後の燕せんとて、さしつさゝれつ、強つしひられつ吞けるに、山崎勘解由、さらば一曲謡はんとて、聲はいと美しくて五衰滅色の秋なれや、落る木の葉の盃、飲酒は谷水のながるゝもまた涙川、水上は吾なる物をものおもふ時しもは、今こそ限なりけれと諷ければ、入道勘解由は、觀世宗接に相傳を得て亂舞の堪能世の知る所なり。かゝる折しも時節に相應せる謠思ひ出しつる事こそ、常に藝を嗜事の深きを顯すのみか、胸裏に勇といふ字の躡る故なりと大に感じ、其後入道の盃を民部納め候へとてさゝれしかば、承候とて頂戴し、水だぶくと受たりけり。其時入道、いで今

はの旅の首途に一さし舞べしとて、腰の刀を抜て差懸し、音たからかに揚て雑兵の手にかゝらんよりはと、思定めて腹一文字に掻切て、其まゝに修羅道にをちこちの土となりぬる、青海苔山の無跡とひてたび給へと舞納められければ、満座者も只今の舞は常よりも幾くまさりて面白くこそ候へ。魯陽が戈を執て入日を招きし形勢を學びし舞とや申べき、また項莊が劍を抜て舞しその心、沛公にありし勢ひ、項羽垓下の破れに我力山を抜き氣世に被らしむ。於戲時利あらず威勢廢しぬと歌はれしも、唯目の前に見る様にこそ候へ。中にも青野が原を青海苔山と引替させ給ひたる巧みこそ、かゝる折には能思召出させ給ひ候へ。宗接が新宅の祝儀に、信濃なる淺間の嶽に立雲のと、烟を雲に語かへ候ひしをこそ、奇特の發明に申候へば、唯今の一字千金の御作意には、天地の勝劣にて候と一同に感稱せり。さて空妻石上に座し、辭世の歌に

何ををしみなにを恨みんもとよりも此ありさまの定れる身に

と詠れたりければ、満座感涙を流す。かゝればまた

ありときゝなしと思ふも迷ひなりまよひなければ悟さへなき

莫レ論ニ勝敗迹。 人我暫時情。

一物不生地。 山寒海水清。

おもひきや千年をかけし山松の朽ぬる時を君に見んとは

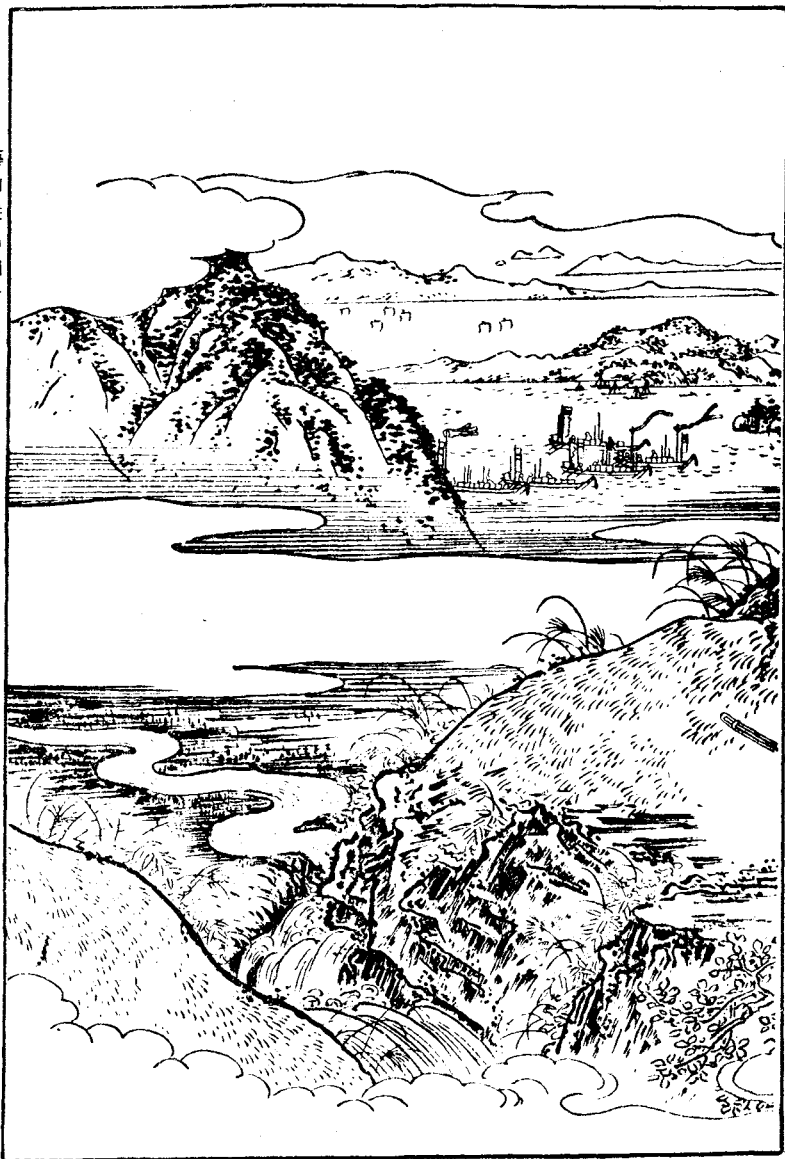
伊香賀民部大輔隆正

山崎勘解由隆方

柿並佐渡守房精

陶全姜
敗死乃
畚





と思々の志を吐ければ、入道面々飛鳥井の餘流を汲て、殊に好事の達者なれば、心詞日頃に十倍して覺えたり。佐渡守が人情を放擲する意趣、最後の善知識なりと甚だ感歎し、さて全妻若楓といふ脇指を弓手の腹へ突立て、矢手へ颯と引回し曳やつと聲をかけ、また取直し心本にぐつと押立、下へ寸と押し賜活と出ければ、手を以て應み出さんとせらるゝ所を、伊香賀民部少輔見事にも遊ばし候と、いひも不致太刀振上ると見えしが、首は前にぞ落にける。(中略)民部たちあがり、入道の着られたりつる小袖に首を包み、杳かに隔て谷川の岸根に重りたる岩の下へ押し、供に在ける者共石を疊み木葉をかけてぞ隠しける。さて山崎、柿並兩人、阿僧祇切までも、斷金朋友の盟はかはらしと互に手に手を執て、太刀を心本に刺立て、二人貫き合て死にければ、その外供奉したる士四人も同じく刺ちがへて伏にけり。民部是をみて何も剛なる死様かな。入道殿の剛なれば、家子郎等もまた勇なりと感じ。(中略)さて吾身は二三町許濱邊へ走り出、立ながら腹かきやぶり、てづからくび押切て倒れ死にけり。民部がふるまひ勇あり義あり忠あり謀ありと感稱せぬは無りけり。其後陶入道の首、元就父子四人實檢ありて、廿日市の黃龍山洞雲寺に納め、石塔立置感懃に孝養せられにけり。

関伽末

〔割註〕彌山の関伽水此處に流れ出づ。此あたりに讃岐の浦といへる地名ありといへども、所

養父崎

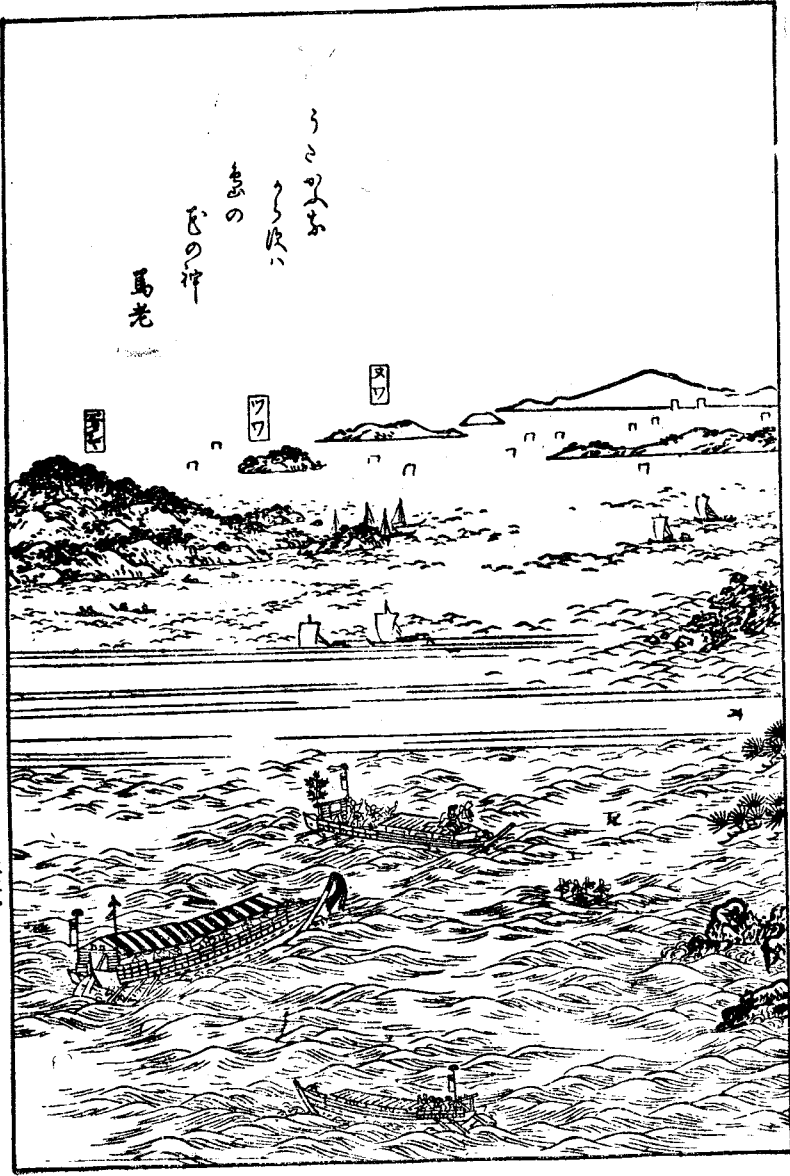
〔割註〕林木生茂り巖石峙立て浪あらし。七浦の外なり。」

養父崎神社 祭神靈鳥〔割註〕鳥巡の時此處にて鳥喰の式あり。

凡島巡の喫といふは、島中の七浦の神社を巡拜することなり。これ三神この島に降臨まし。御座所の地を定めんとて、浦々を見めぐらせたまひし故事によれるとかや。その式は願主吉辰を擇び前日より潔齋をなし、當日の未明大宮神前御等濱より船に乗る。祠官の船には四手切かけ賢木を立て先に進む。願主は眞梶しげぬける船に幕など引、飭水主十二人こゑを帆にあげ、洲崎の松も榮ゆくなど諷ひ立て漕出す。饗の船には宿のあるじ以下乗れり。都合船三艘御山を右になし廻る。まづ杉の浦に着て各修禊し社頭に拜謁す。祠官社前に樂を奏し退出のときにいたりて、拜殿の濱に茅の輪をたてくどりて祓をなす。以下浦々その式異なることなし。但杉の浦にては別に朝餉の式ありて、膳部質朴なり。それより頓て船を出し鷹巢、腰細の浦をすぎ、青海苔の浦にいたる。此處にて午飯を調ふ。飯上に青海苔を粉にしてかくること例なり。さてその式をはりて、また舟を漕出し養父崎につく。この地洲濱もなく、岩石かさなりてうちよする波いと清く、松の木の間朱の玉垣みえさせたまふ。祠官ふなばたにたち出、黍を海上にうかべ、鳥向樂を奏すれば、たちまちに靈鳥一雙嶺よりとび來り、祠官の船に移り、波にうかべる黍を雄鳥まづおりてあぐ。次に雌鳥また下りてあぐ。其時前後の船舷を叩き歡の聲を發してどよめくこと、暫しはなりもやまずとばかりありて、また雄鳥來りてあぐ。凡て三度大かた鳥巡の多き時は、一日に二三艘におよぶことありといへども、次第みなかくの如し。但

養父崎
神社





うさぎふ

うさぎふ

志の

志の

馬老

マ

マ

マ

山白濱神社

とまり子

いんまけ

とらぬの

久しき

ちんか

しんき

松ヶけ

村田

東門





船中せうちゆうに不淨ふじやう汚穢わだちあれば、靈鳥こがし出ることなし。もしさる事もあれば、祠堂かたぬし船中せうちゆうを點檢てんけんし聊ちよかにても障さやりある人ひとをば、みな船ふねよりおろし跡あとの濱はまに残のこし、其そのち後のち船中せうちゆうを修禊しゆけつし新たに乘しりぞをうかぶれば、ことなくあがるなり。それより山白濱やましろはまをすぎて洲屋すぢやの浦うらにいたる。宿主やうめし餠餅もんびんの饗ちやうじをなす。いかなる所由ゆゑといふことをしらす。其所そこを過すまて御床みとこの浦うらにいたる。各おのづかまた修禊しゆけつし、石上いしのかみの拜殿はいでんに蹲踞すんくわす。祠堂かたぬし祝詞のりとをよみて茅ちの輪わを納なめ、大元おほもとの浦うらに漕着そうちやくけ各船おのづかより下くだり、神拜かみはいをなして後宴ごえんの席むらを開ひらく。さて大宮おほみや容ゆる神宮かみやに報賽ほうさいの神樂かみらを奉たてまつる。以上いじやう島巡しまめぐりの梗概けいがいなり。また浦巡うらめぐりといふこともあり。これはさせる潔齋けつさいなどもせず、たゞ山水さんすい逍遙せうやうのためなり。「割註わかつ」靈鳥こがしのこと四よの卷まき大頭おほがしら大明神だいめいじんの件くだにいふべし。」

島めぐりのこゝろをよめる

なゝ浦うらの島めぐりする舟ふねの中うちのものゝ音ねあかす神かみやきくらん 中納言持豊

いつまでもみるめはかれしいつくしまめぐる浦回うらわひを面おもかけにして 似 雲

山白濱やましろはま 「割註わかつ」洲濱すぢはま三町さんちやう、この處ところに菓子かし盆石ひんせきといふあり、形似かたちにたるを以もて名なづけたり。」

山白濱神社やましろはまじんじや 祭神まつりかみ表津うらつ少童命すちやうのみこと 「割註わかつ」島巡しまめぐり第五ごの社やしろ。」

かしこしな名なさへうごかぬ山しろの濱邊はまべにしめし神かみの宮居みやゐは 中納言持豊

革籠崎かわごさき 「割註わかつ」同浦どううらの鼻邊はなべにあり。

早咲櫻はやさきうづ 「割註わかつ」同所どうじよにあり。障月むづきの末すえ既にすでに花開はなひらて香色かうしよくことに愛あいすべし。」

桃木浦〔割註〕濱二町入江あり。〕

棟木浦〔割註〕上におなじ。〕

江浦〔割註〕上におなじ。〕

下り松浦〔割註〕濱一町半入江あり。此浦に烏帽子岩といふあり、形似たるゆるゑに名とす。〕

阿多太島〔割註〕同所の沖手にあり。山上に明神の祠を置けり。〕

道行ぶりに曰、東のかたさし出たるやまの崎といつくしまのあはひ、二十町ばかりへだてたる中に、小じまのさとくしげに見ゆるが、ひとつ侍る。これなん小黒じまといふなるべし。この島あたりをあたゝとぞいふなる。

しま守にいざことゝはんたがためになにのあたゝと名にしおひけん 源 貞 世
そのみなみに霞むしまくあり、まさかりのせとゞぞ申なり。

長浦〔割註〕洲濱三町半。〕

須屋浦〔割註〕或は洲屋に作る。洲はま五町。〕

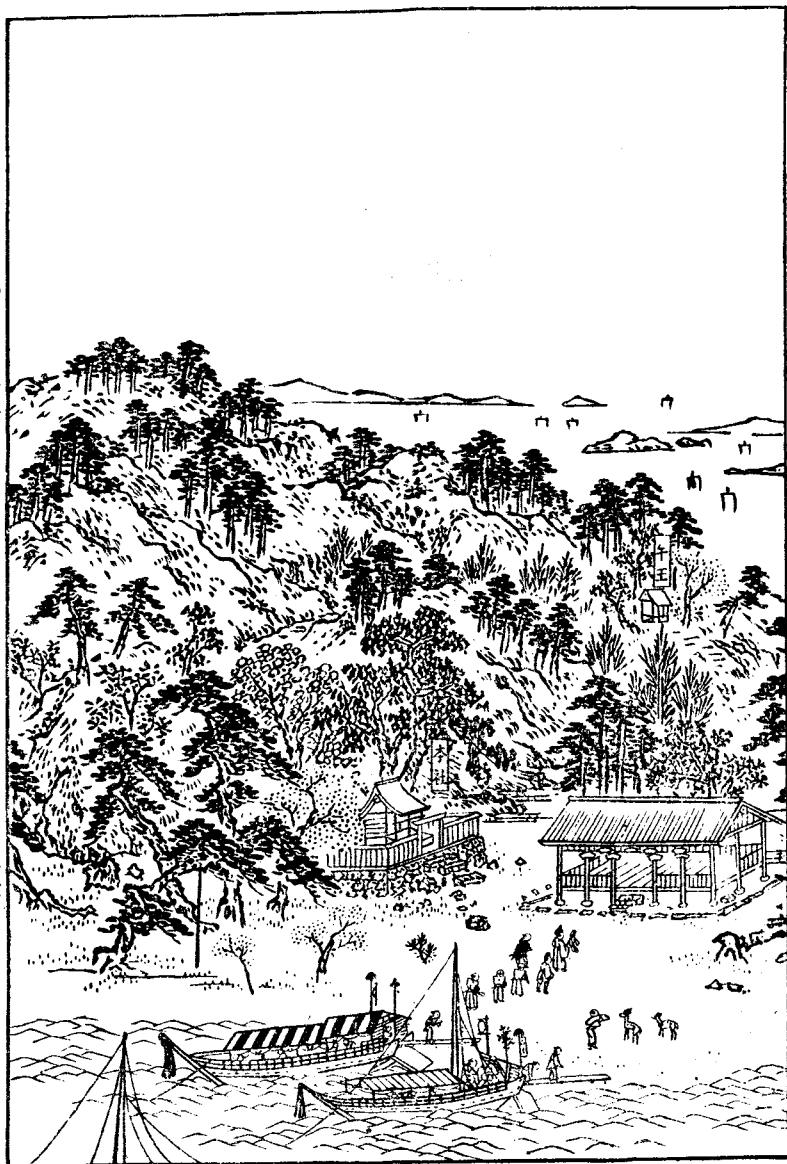
須屋浦神社 祭神表筒男命〔割註〕島巡第六の社。〕

牛王社〔割註〕同浦にあり。祭神猿田彦大神。〕

須屋清水〔割註〕御床浦より流れ出る潤水なり。來往の旅船これを汲みて海路の用水とす。〕

須屋浦神社
せやうらのじんじや





御床浦
神社





須屋浦ひて

餡餅の餐

を行ふ

須屋浦
田





浦はるゝすやの朝なき夕なきに見るめはさこそたぐひなからめ

中納言持豊

新贅浦

〔割註〕濱一町半。〕

猪子坂

御床浦

御床浦神社

〔割註〕神殿石上に建たり。〕 祭神市杵島姫命 〔割註〕島巡第七の社の

相傳へていはく、此浦は本社の神天降らせたまひし時の眞床即ちいはほとなりし所なりとぞ。

あふげなほ天くだりましゝそのかみの御床のいはほうごきなきかけ

中納言持豊

牛王社

〔割註〕同浦にあり。此社のほとりに烏帽子岩あり。〕 祭神猿田彦大神。

大川浦

〔割註〕濱一町。〕

大江浦

〔割註〕入江あり鰐口岩といふ、此浦にあり。形似たるをもて名とす。〕

貝壳塚

〔割註〕大江の浦の濱邊にあり。十三町ばかりの山間に二丈餘の窟あり、其下貝殻多し。弘治

年内侍

年中陶敗亡の時殘卒この處に遁れ來り、磯邊の貝をひろひ數日しのび居しとぞ。〕

内侍岩

〔割註〕同所にあり。傳へいふ、徳大寺左大将實定卿いまだ大納言たりし時、嚴島へ下向あり

て島の内侍有子といへるを愛したまひしに。歸京の時、此處にきたり別を悲歎せしにより此名ありとい

ふ。平家物語、盛衰記等の説による時は、内侍はみな實定卿に従ひて都へのぼりしことゝ見えたり。

今按に、目餘の内侍は上りつらめども、有子は故ありてとどまりし故に、このかなしみはありけるにや。後思慕のあまり舟に乗りゆきて、住吉の沖にて入水したり。」

源平盛衰記曰、内侍の中に有子といふ者あり。十六七にもやなるらん年少く幼稚で常もまゐらず。をりく見來けるが希代の琵琶の上手なり。あでやかなる事がらものいとをしき顔だち、故郷も忘れぬべしと實定常に仰られけり。或時有子とく參て、唯一人御前にさぶらひけるを、わが身は此國の者かと御尋ありけれども、顔うちあかめて御返事もまうさず、愧かしげなる有様、いとど由ありて御覽じければ、實定思召入たる御氣色にて、疊紙に御手すさみありて有子が前へなげさせたまへる。

山のはにちぎりて出んよはの月めぐり逢べき折をしらねど

有子内侍はこの手すさみを給て、堪ず思ひしめたるけしきにて御前をばたちぬ。實定はたゞ尋常の情に思召けるを、内侍はしのびがたくぞおもひしづみける。さても七日過ぬれば都へかへり上りたまふ。内侍ども、御送にぞ參ける。有子はさらぬだにかなしきに、上りたまひなん後は、よそにて争か見奉らんとて、衣引かづきて臥にけり。内侍ども一夜の泊まで御供申て、其夜は殊に名残を惜みたまつり。明ぬれば暇申けるを實定宣ひけるは、餘波は尋常なりといひながら、これは理にもすぎたり。何かはくるしかるべき、都までおくりつけ給へかし。またもとおもふ見参もいつかはとおぼえて、あかぬ思ひの心もとなきぞと仰られければ、内侍どもさらぬだに忍びがたきなごりに、かくこまくと宣

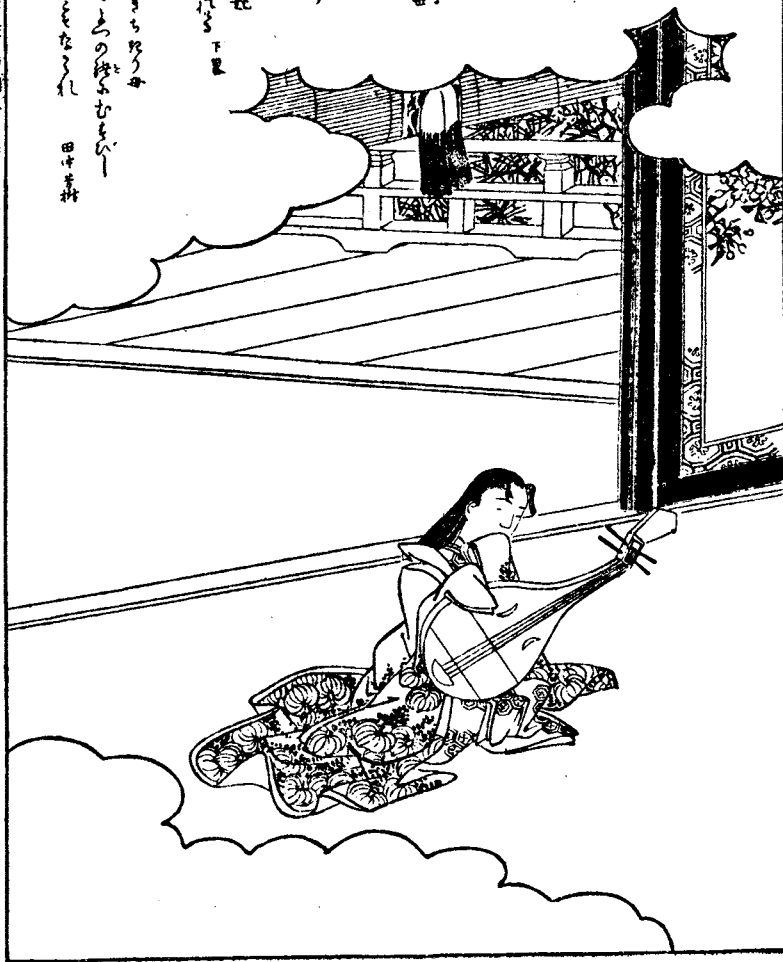
實定^{まねま}
御の^{みま}
御前^{ごまへ}
小^こ
おいて
有子^{ありこ}
内^{うち}
侍^{さむらい}
琵琶^{びわ}
外^{そと}
弾^ひ
く^く
番^{ばん}



芳園^{ほうえん}
印^{いん}
程^{てい}

体源抄曰
 融上其
 輪
 な人分
 波羅大政入道
 嚴島の内侍
 了
 家
 されを
 小
 およ
 を
 但他人
 へ
 下

仁愛の世を
 一
 田中兼光



ひければ、都までと送り奉りけり。(中略) 借も有子の内侍は、徳大寺の何となき言の葉を得て、思ひ日々にぞまさりける。千早振神に祈をかくれども、その事かなふべきにあらねば、浮世につれなくあればこそかゝる忍びがたきこともあれ、千尋の底に沈みなばやと思ひつゝ、舩舟に便船してありし人のこひしさに、都ちかきところにて兎も角もならんとて、波のうへにぞ漂ひける。せめての事と哀れなり。船の中の慰には琵琶の曲をぞ弾ける。調弾數曲をつくせば聲松の風にやかよふらん。四絃緩急にかき亂せば、響波の音にも紛ひけり。かの白樂天潯陽江の口に流されて、舟の中に琵琶を弾ずる音をきけば、鏗々然として京都のこゑあり。故郷のこひしさにその人を尋ぬれば、我は長安の娼家の女なり、十三にして琵琶を學び得て、名は教坊第一部にありしかども、顔色朝暮におとろへて、老大人にして商人の婦となれり。夫は利を重んじて他にゆけば、我は獨むなしき船を守て波のうへに浮ぶといひながら、琵琶を抱きて面をさしくしけん、古も思ひ出られて哀れなり。有子終に攝津國住吉の湊の沖にて、船に立出つゝ海上はるかに見渡して

はかなしや浪の下にもいりぬべし月の都の人や見る迹

とうち詠めて、しのびやかに念佛申て海中へぞしづみける。舟の中の者ども、あれや／＼と騒ぎけれど、も、またもみえざりければちからなし。かの潯陽の老女は、色衰て商人に隨て舟を守る。このいつくしまの有子は、年若くして實定をこひて水にぞしづみける。いつしかかのうた、都に披露ありけれ

室濱 むろはま ば、みな人あはれとおもひけり。見馴し内侍が事なれば、徳大寺の左大将さこそ不便におぼしけぬ。
〔割註〕洲濱四町。〕

鵜泊 うのどまり

踏鞴濁 たがしづ 〔割註〕洲濱二丁餘。往昔平宗盛彌山寄附の洪鐘を此處にて鑄しといふ。一名は語の濱とも

鱈浦 たがのうら いふ。この浦に鬼岩、大黒岩、梶石といふ三つの名石あり、みな形の似たる故に名とす。〔割註〕濱半丁。〕

江浦 えのうら 〔割註〕洲濱一丁。〕

網浦 あみのうら 〔割註〕洲濱一町半櫻多し。此浦より大元へかよふ路あり。〕

蛭子社 えびす 〔割註〕同所にあり。〕

淺葱櫻 あさぎ 〔割註〕同所にあり、白花水色を帶たり、まことに奇木なり。〕

以上島巡の次第によりて記すところなり。以下は大宮のうしろのかたより起りて大元南町、西町、瀧町などをはる。

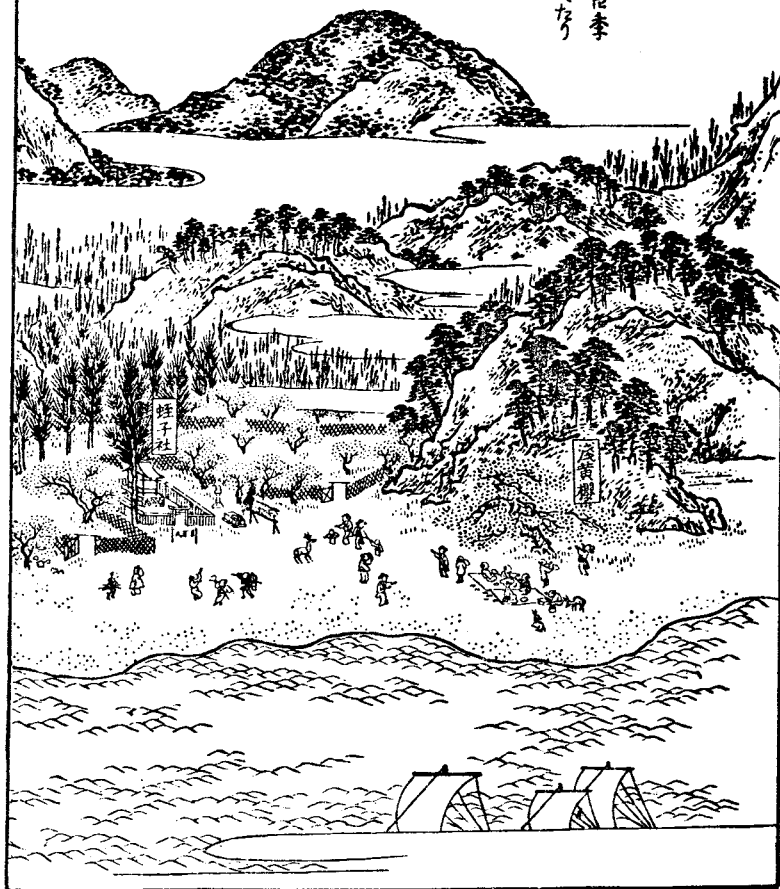
預坊 よけ 〔割註〕寶庫の上の山の麓にあり、社僧なり、開基未詳。〕本尊不動〔割註〕御長五寸一分、

弘法大師の作○この餘櫛木坊、大乘坊、正覺坊等の社僧寺ありしかども今廢してなし。〕

寶泉院 ほうせんいん 〔割註〕南町にあり、南照山松壽寺と號す。京師仁和寺に屬す。〕本尊十一面觀音〔割註〕御

網の浦
蛭子の社

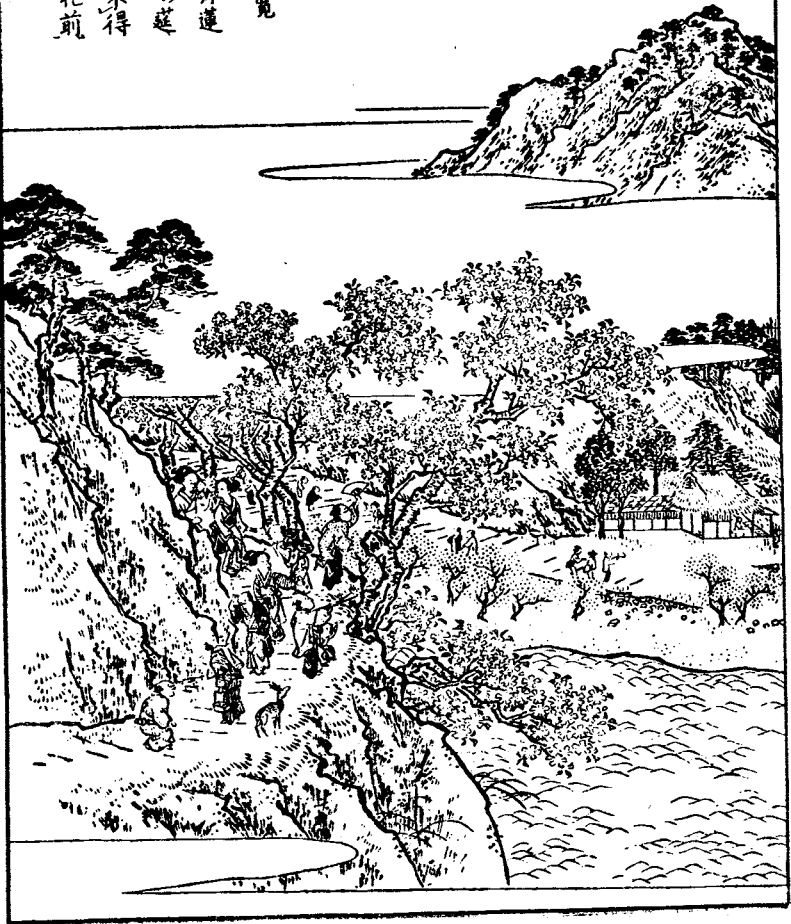
淺黄櫨ハ長明の四季
物語ふもゝ免まへんたり
ちるはものちり



醉妓

鳥山輔寬

酒豪自喚女青蓮
日日倍歡公子蓮
春醉有時禁不得
琵琶當枕卧花前



長一尺六寸。弘法大師の作。」（割註）各御長一尺三寸。作詳ならず。開基（詳かならず）

龜居山大願寺

（割註）大西町にあり、放光院と號す。京師嵯峨大覺寺末派なり。古文書に本願寺とあり、今も本願大願寺と稱せるはこの謂なるべし。」

本尊藥師如來 （割註）座像御長一尺五寸、弘法大師の作。」脇士不動 （割註）立像御長一尺五寸。同

作。」毘沙門天 （割註）立像御長同寸。作詳ならず。」護摩堂 （割註）境内にあり。本尊如意輪

觀音、御長一尺六寸、行基の作。」鎮守住吉大明神社 （割註）境内にあり。元龜二年吉田兼右卿下同

の時勸請する所なり。」老松 （割註）庭前にあり。幹の圍み凡五抱、高さ五丈餘、老鱗數百歳の

ものなり。傳へいふ、小松内府重盛の植るところなりと。」

當寺の開基年歴久遠にして考ふべからず、今は三十一世の祖了海上人を以て中興の開祖とせり。（了

海は建仁のころの人）世々大宮修理の掌として一島の巨利なりき。庭には松風颯々として迷暗の夢を

おどろかし、前には波瀾渺々として羸塵の心を洗ふ、實に清幽閑寂の古梵宮なり。

什寶

弘法大師自作尊像 （割註）座像御長一尺八寸厨子入。」辨財天拾六神像 （割註）弘法大師相州江

の島に於て一萬座の護摩脩法するとき、其灰を以て此像を作るよし裏書に見えたり。年月日も記し

てはあれど磨滅して不詳。」五大尊一幅（大師の染翰）不動尊一幅（同上）彌陀名號（同上）八景野立屏風「割註」尊海上人大藏經を得んが爲に渡韓の時、請得て携へかへられしといふ。別に其縮圖を寶物の卷に載せたり。」古法眼畫屏風 雅樂助畫屏風 雪舟蓮畫 龜居山記「割註」寛文の頃の當職以空大僧正、時の帝へ奏請し、得る所の宸翰なり。院主の外かたく見ることを禁す。」

此餘錄倉のころ、將軍家北條家などよりの書翰等數多あれども煩はしければ略しつ。

大藏坊

「割註」大願寺のうちにあり。同寺の末院、開基詳らかならず。」

本尊不動

「割註」御長一尺。弘法大師の作。」

泉光院

「割註」中西町にあり、これも大願寺の子院なり、開基不詳。」

本尊阿彌陀

「割註」御長一尺五寸、作詳らかならず。」鎮守金比羅社（寺内にあり）

大元浦

「割註」本社の西南にして或は竹原濱ともいふ。この浦に牛石とて名石あり。形似たる故に名とす。」

この邊泉石幽邃の地なり。また大木の櫻數株ありて妖艶たる花盛には、花下に遊宴を催して春を惜むの輩少からず、かつ前溪には麴條魚を産す、その味他境に異なり。

大元社

「割註」同所にあり。」祭神國常立尊大山祇神 合殿佐伯鞍職

及橋とら 看花もなご の 畝つ





末社 大國主神 八幡宮

この餘二字の小祠あり、祭神所傳をうしなへり。

陰徳太平記曰、其程へて和智降實いかゞおもひけん、神前に取籠り燒草を取込み、討手來らば當社を燒拂はんと巧みけり。茲によりて元就朝臣より近習に召仕はれける熊谷右衛門尉に、巖島へわたり和智討果すべしと謀の様體いひ含めらる。熊谷やがて彼地へ渡り神前の廻廊にしのび入、和智右衛門尉が内外へ出入するを伺ひ走りかゝりて無手とくむ。熊谷大力なれば些も働かさず、廻廊まで引出して元就朝臣の上意の趣いひ聞せ刺殺しけり。和智もさる勇士なれば、かくやみくんと討るべきに非ざれども、寶殿を燒かんとせし惡逆により神爵を立所に蒙り、云甲斐なく討たれ當世の武名を朽すのみか、未來は八大地獄に沈淪して獄卒の鐵棒を喫し、永々の苦患遁るゝ期あるべからず。舍弟湯谷又八久豊は理をつくして宥めければ、頓て頭を延て切られけり。郎等三人をも頭を刎てけり。かくて和智兄弟の怨讎諸人を惱しける間、かの島の者どもこれを宥めんがため、大本の社の邊に叢祠一字を建立し神と崇めけるとかや。この度寶殿觸穢によりて當社とくく作り改められ、遷宮の爲吉田兼見卿下向したまふ。其儀式嚴重丁寧にとり行はれける。神慮いかに歡喜あるべきとぞ覺えたる。(割註)今按に、上件所載の二社祭神さだかならざるは、もしくはこの豊郷、久豊の兄弟の靈社にはあらずか、なほ考ふべし。

おほ本の浦にて

うらとほみよる舟まねく尾花かな

月村齋宗願

大元櫻花（八景の一）

みまほしき花の下陰これまた神のいがきやこえてとはまし

冷泉亞相爲久

心ある人や手向にうゑそへてさくらぞしげおほ元のみや

宣阿

この貴賤不淨ふれずや山ざくら

野坡

おほもとや拜むも見るもはつざくら

風律

祠在仙山蒼波濱 白櫻相映滿階春

從二位韶光

雲蒸霞散常彷彿 一段風流仰此神

從二位韶光

何年移植漢家種 凝雪興雲萬樹奇

（黃壁）僧 岱 峰

果熟廟前吾要用

黃鶯他日莫相親

（黃壁）僧 岱 峰

社下白櫻交影深

濃雲淡靄共森々

北村篤所

三春花事無多日

坐愛千金一刻陰

北村篤所

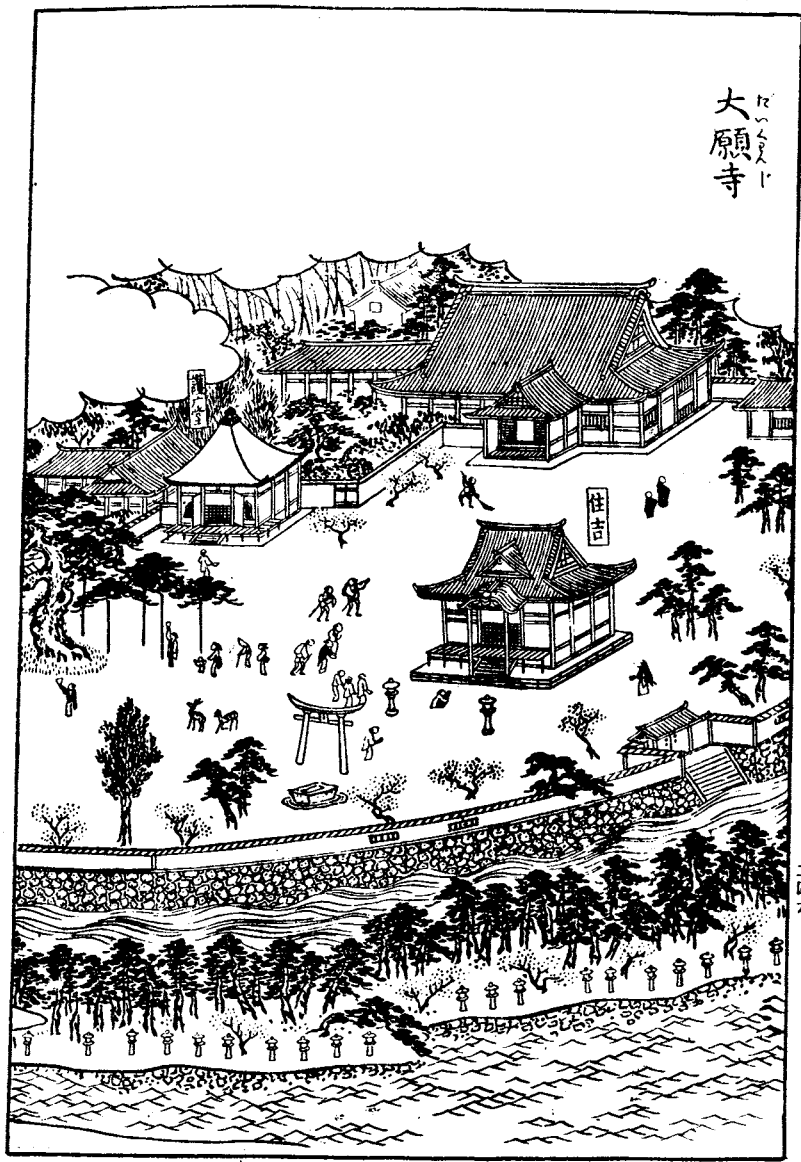
橘山

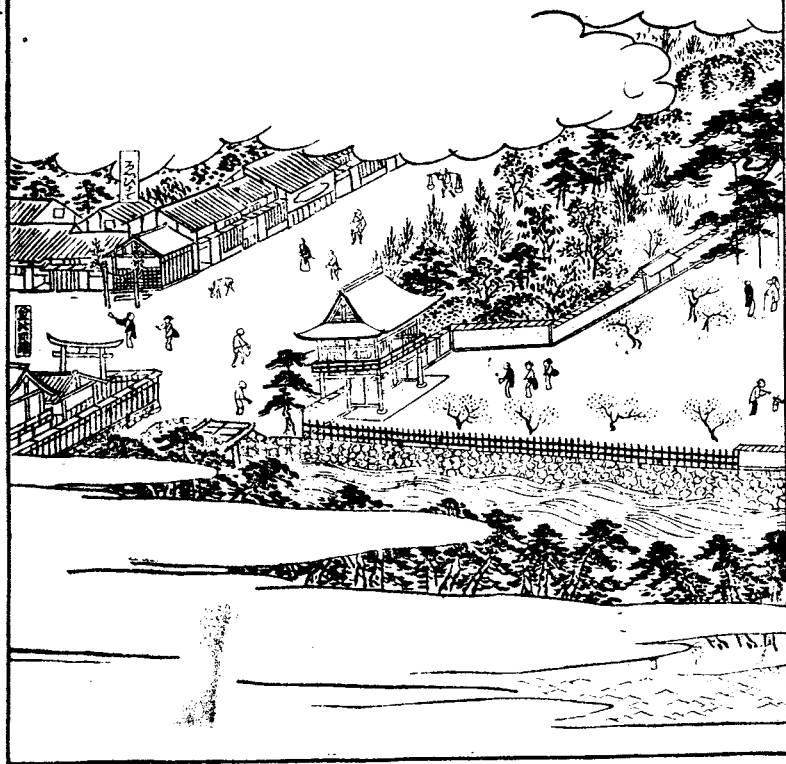
〔割註〕大元の上の山をいふ。此山に山姥の飯炊石といふあり。名義詳らかならず。

道祖神社

〔割註〕同山路にあり、一に幸神社といふ。祭神猿田彦神、天鈿女命。

大願寺
大願寺





鍔釜
横堅石

横石ハ平清たけのつよ

盛公堅石ハ

毛利元就もとむねの

造つくり免まぬるへこ

と鑄あるたる文

又ゆ石いハ言ひ

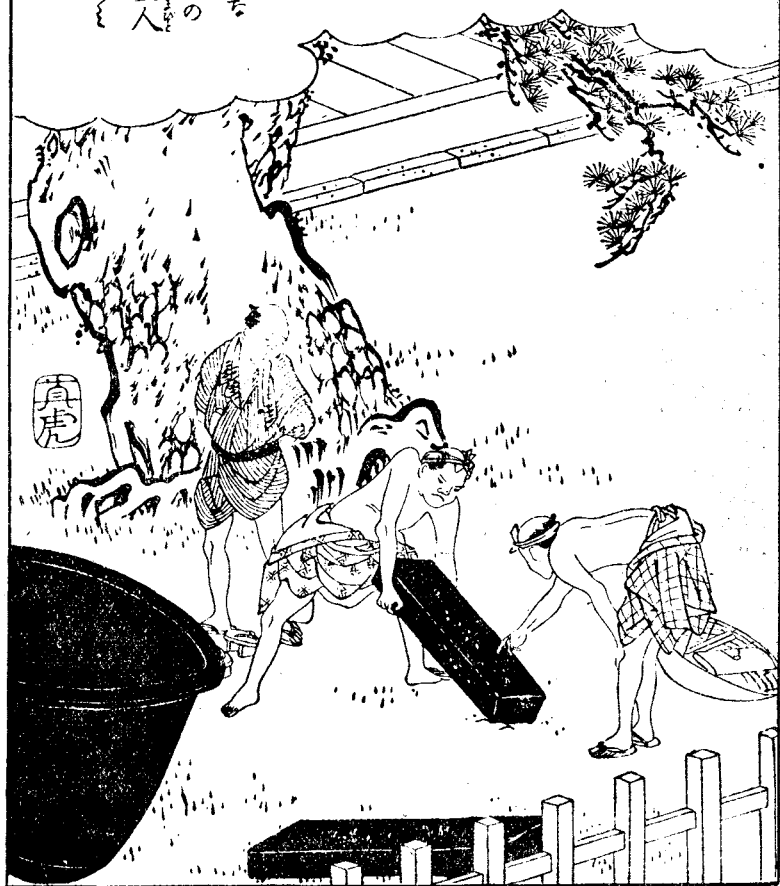
傳つたへまと実ハ鍔つら吉

りそのより大湯屋おほゆの

條ぢょうニ記しとり今いまハ上うへ人

角力かくりきのおもてとのも

ちれ



あせ山

〔割註〕木比屋谷にあり、茅屋數軒を設く、島内の婦人月經のときはかならずまづ此所に避け

日をおくれり。然るにいつのころより十日廿日の忌の者の避場となれり。そもくこの島の例とし

て、死穢はかならず地方に避ることなるをかくなれるは、冥慮を蔑如してまつるにあらすや。但し

百日忌の者は今もなほ外に居て七十五日にみちてこの地にかへり、その餘日を終へて後家にかへる。

さすがに神地のしるしなり。また産穢も死穢に同じ。子のまさに生れんとするにあたりて、地方に出

居七十五日をへて家にかへる。但し死穢は七十五日にて島にはかへれども、前にいへるごとくたゞち

に家に入れざるを以て産穢よりも重きを知べし。かくてその百日にあたる日を産のかたにてはも、

かといふ。この日にうまれし子の名をつくるなり。この日まではチンコとのみ呼びて名はなし。これ

嚴島にかぎれることなり。今按に、あせ山は血山なるべし。延喜齋宮式延曆儀式帳等の忌詞に血を

せといへり。一説に悪山また足山などいへるは杜撰なり。

廢仙藏坊

〔割註〕あせ山のみちにあり。

十王堂

〔割註〕同所にあり。

廢眞珠院

〔割註〕木比屋谷にあり。

石風爐

〔割註〕同所にあり、石をたゝみ室を作る。廣さ六七尺、高さ一丈餘、藻をしき潮をそゝぎ病

ある者これに入て座するに、頓に宿疾を愈しむ、功驗世に名だかし。

おんじのじん
大元神社

櫻

茶山

西土偽王原

姓姚天香國

色專驕傲一

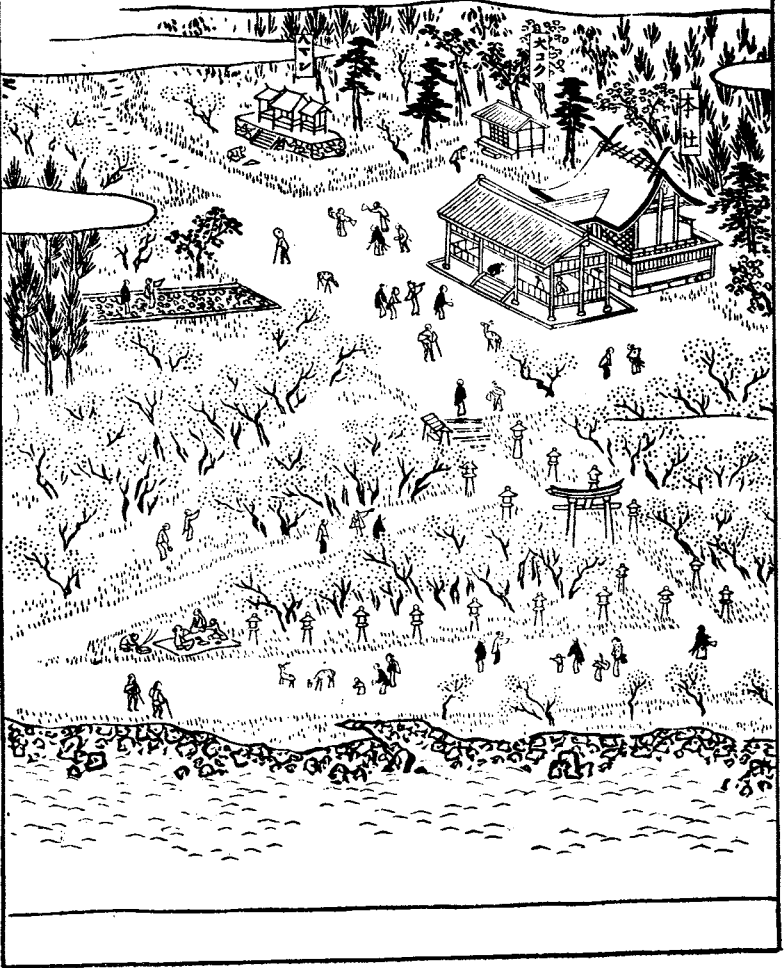
從歸化絆櫻

花羞愧曾來

彌僭號



其二



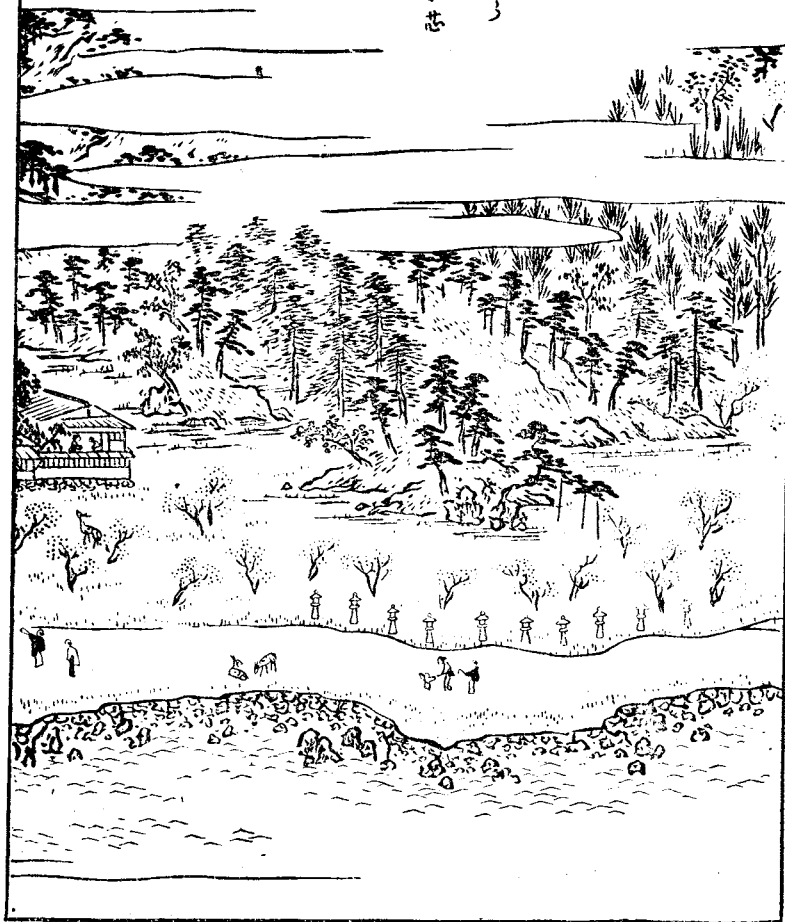
人去遠て

一ゆりみ

一て

うり斜り

未忠



やよいのもつらまぢ
 子松不元の石風呂
 不ーやととて花を
 兄とよ先了

田中若樹

う物事とえて浪ハ
 心花なきゆふの
 うらさそりひく

もも 桜ら那



大元櫻花

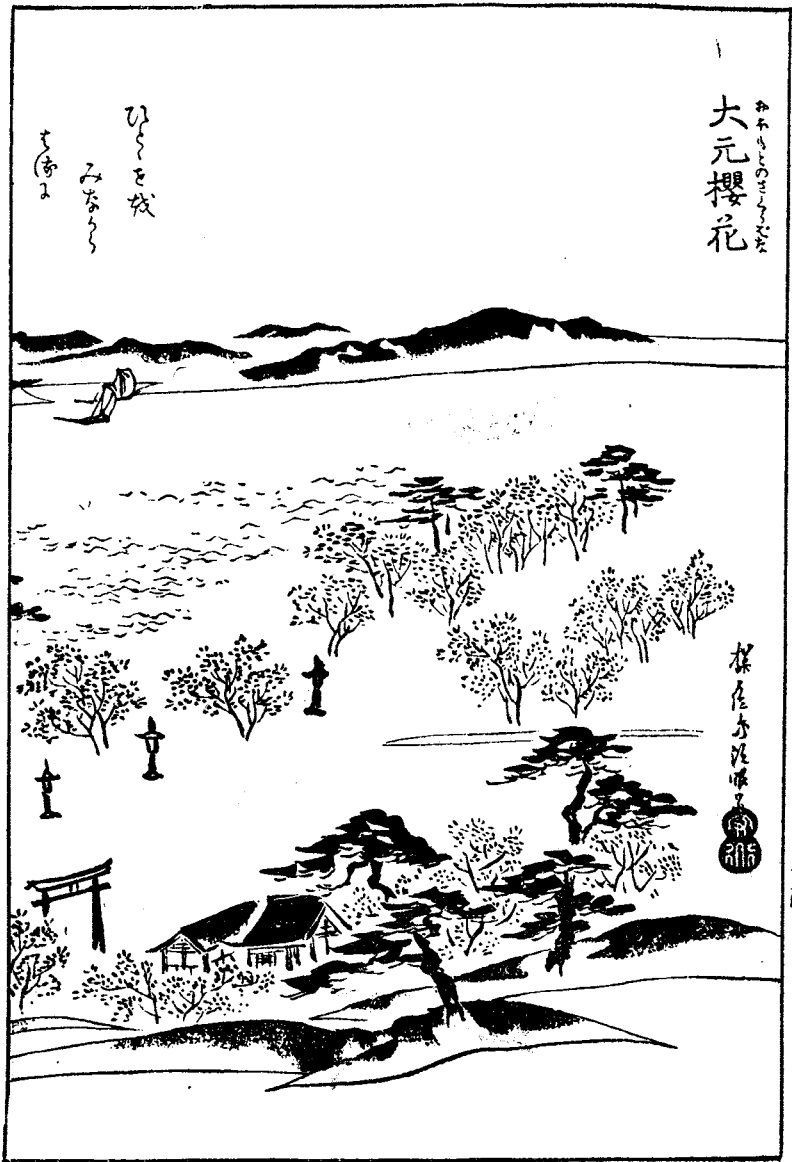
おんりとのさくら

ひらき

みち

ま

櫻在乃波原



たしなむ

る代

あはれを舞

花はも

う那

清水

深臣

いとまなき

日まかり花ハ

さねなき

風胡



傳云、もとの風呂は弘法大師彌山に於て修法のとき、求聞持修行の僧徒嵐濕の氣に惱めるを見て、是をつくり濕氣を去らしめし所なりとぞ。實に千載の石室にして凡作にあらず。

經の尾

〔割註〕大元へかよふ道にあり。

傳云、平の清盛許多の小石に法花の首題を書寫し、此處に納めしとぞ。今も一石塔ありて其處よりまゝ經石を出すことあり。またこの地の草木は枯槁せしものといへども、采樵すれば崇ありといふ。いかなる所由ありて然るやしられず。

西町

〔割註〕本社より西の惣稱にしてその内數町にわかる。大西町、神馬屋町、中西町、久保町、中江

町、瀧町等なり。南町もこれに屬す。

神厩

〔割註〕神厩町にあり。本殿の神馬をつなぎたり。

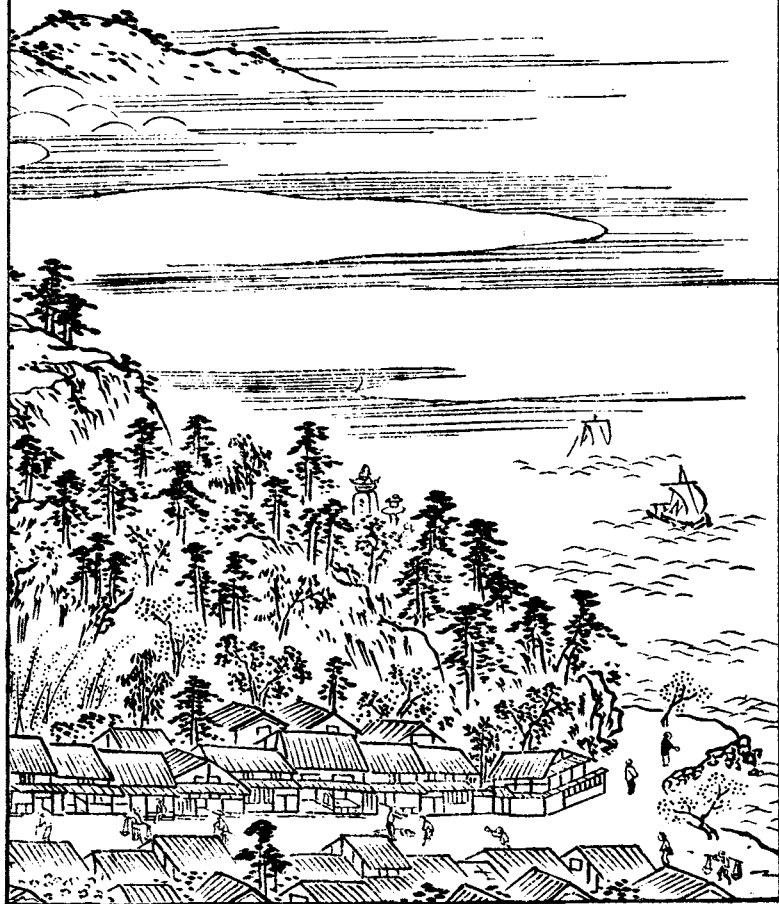
むかしより鹿毛、栗色などの異毛の馬を獻すといへども、次第に毛をかへて二三年の間に白馬となる。もとより神馬にのみ用ふれば常は厩に繫ていただきます。この外には島内かつて馬をおかしめざるに、島人時として馬脊を拾ふことあり。俗傳に御神これに御して深夜微行し給ふ故なりといへり。田中芳樹が綠陰漫筆に云、白は皇國の貴色なり。毎年の正月七日に行はるゝ白馬節會も、内裏式に左右馬寮各牽二疋馬一入自延政門。延喜左馬寮式に、凡青馬二十疋自十一月一日一、至二月七日二寮半分飼之。とありて、その訓をも安乎字麻とつけ、ことに萬葉集卷二十には、水鳥能可毛能羽能伊呂

乃青馬乎家布美流比等波可藝利奈之等伊布などとさへよめれど、加茂眞淵の説に、家持のうたも鴨の羽のごとく青き毛いろのうまといふにはあらず。あをうまは白きうまのことなれば青といふ詞の序に、初二の句はおけるのみとある如くにて、實は青と白と言葉をかよはしもちふることあるが故に、白馬を青馬ともいへるなり。さるは河海抄に十節錄云、正月七日看青馬、青以白爲日本。天有白龍、地有白馬。是日見白馬。即年中邪氣遠去不來。また兼盛集に

ふる雪にいろもかはらでひくものをたど青うまとなづけそめけん
土佐日記に、

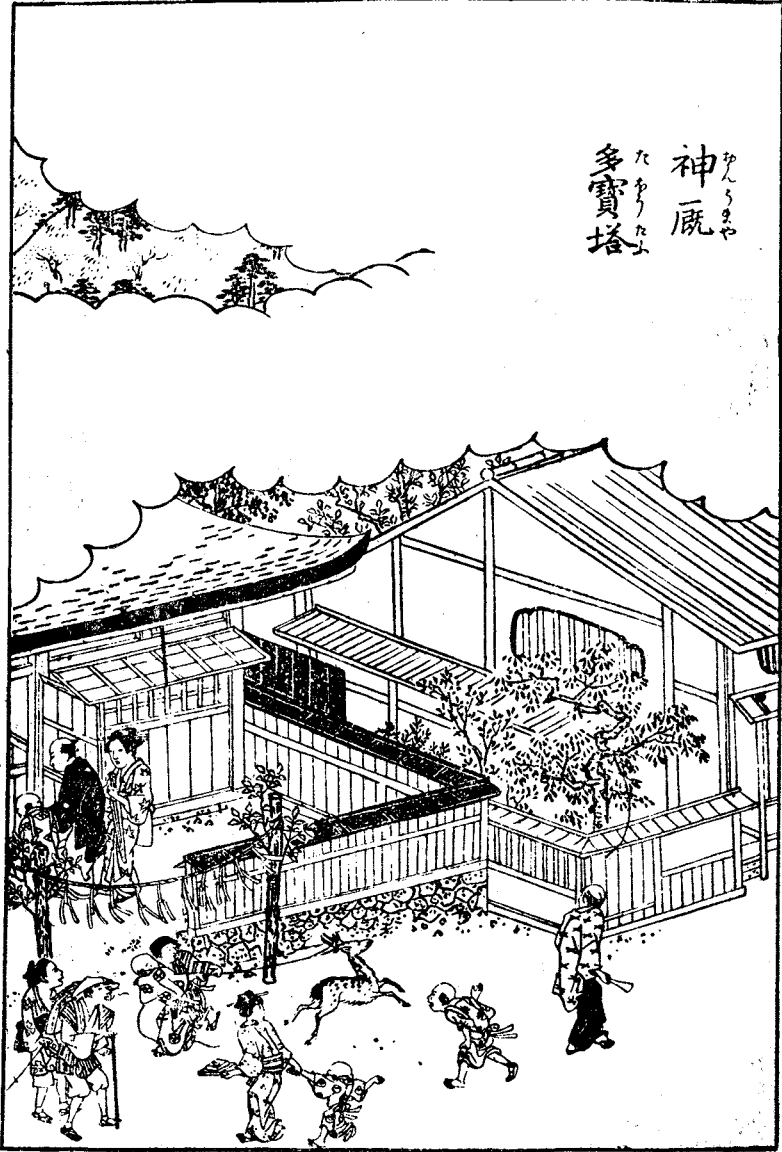
七日になりぬ、おなじみなとにあり、けふはあを馬を思へどかひなし、たど波のしろきのみぞ見ゆる。とあるなどその證にあらずや。また日本紀神武卷に、青雲、白肩津とあるは、しら雲のしらかたといふべきを、青と白とかよはす例ゆゑかくつゞけ、源氏物語の夕顔の卷に、すだれなどもいとしろうとかけるは、青き藤を白うといへるなどおもふべし。嚴島社の神馬鹿毛を獻りても栗毛を奉りてもみな白毛にかはること、くすしき神の御心より起れることにこそ。そもく白質のものを尊ぶことは馬のみにあらず服色なども然り。衣服令に、白黄丹とつらねて集解の釋に、我朝以白色爲貴色、天皇服也といひ。日本紀略に弘仁十一年正月甲戌朔、詔曰、其服色大小、神事及季冬奉幣諸陵、一則帛衣と載て、帛衣はやがて白色の衣なり。飾抄に帛御装束着御事御大内之時一度

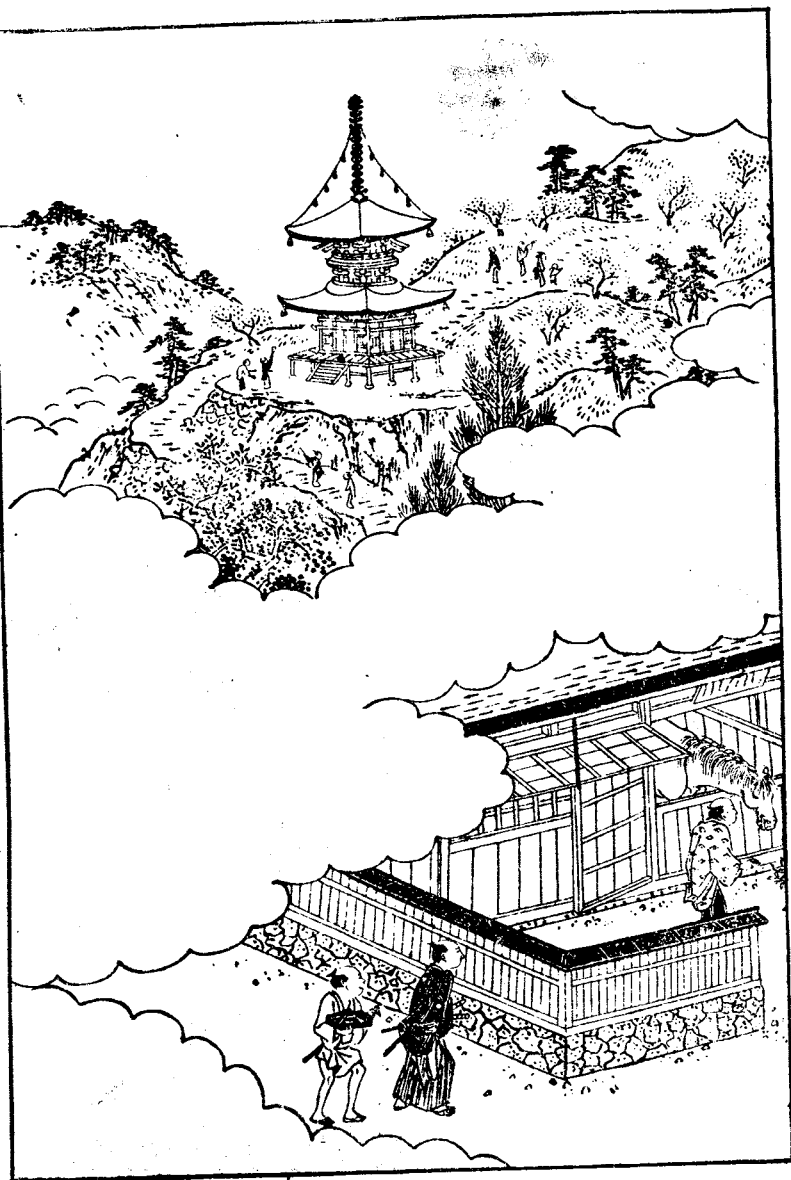
經尾きんぶし
地藏院
十王堂





伊豆
神
多寶塔
た
た
た





紅葉谷
以中庵
尺宮

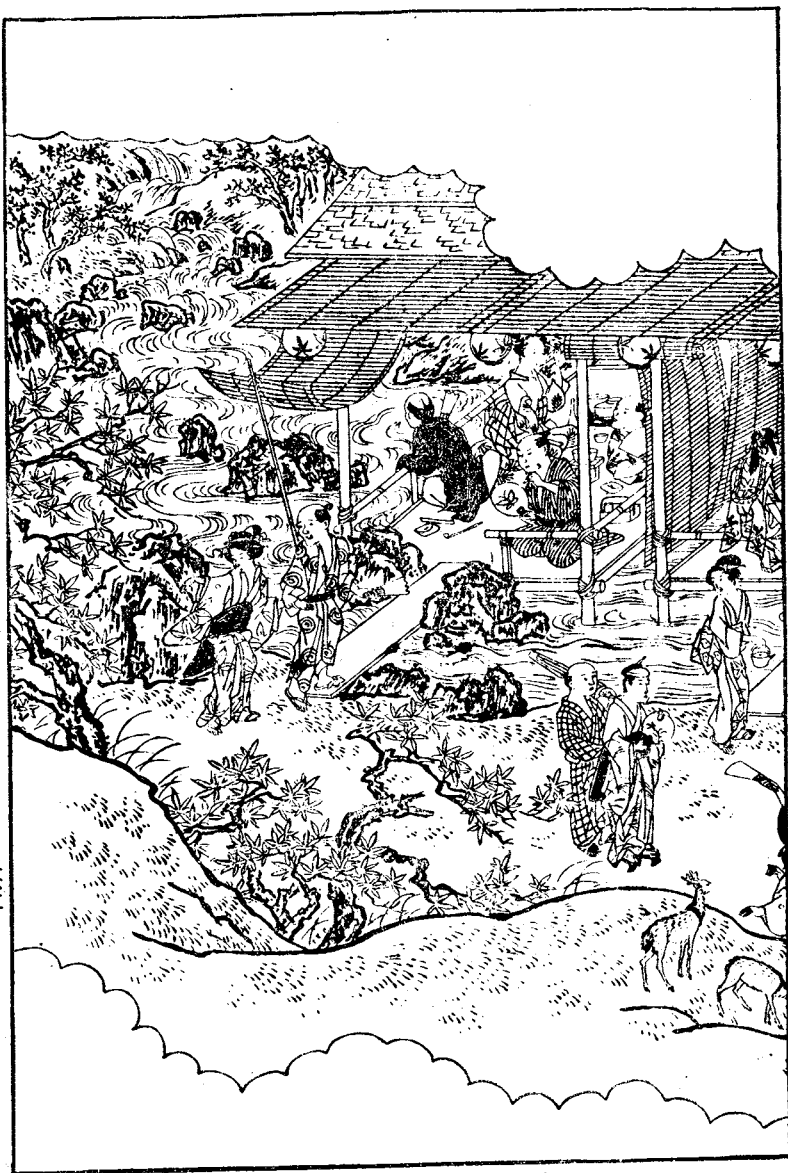


巧き
 やぶふ
 とたし
 んの
 いぢび
 とし
 とうて
 ろしの
 おもふ
 茶はと
 吉原
 大平



紅葉谷
納涼





召ニ改御装束とあるを、一本には、白御装束とあるにて知べし。かく七日の御馬かつ御服のたぐひもみな白なるを以て、この社の神馬の異毛もかならず白毛になること、またく神の御心なれば奇しきに似てあやしきにあらざるなり。漢土はこれがうらうへにて酉陽雜俎前集十七に、成式脩竹里私第園敷畝。王戊年有蜂如麻子。蜂膠土爲巢於庭前簷。大如鷄卵。色正白可愛。家弟惡而壞之。其冬果蠶三鎮手足。宋史言。宋明帝惡レ言。白。金樓子言。子婚日疾風雪下。幃幕變レ白以爲不祥。抑知俗忌レ白久矣。といへる和漢のけぢめ雲泥なるを知べしといへり。

華藏院

〔割註〕神厩間にあり、社僧なり、開基詳かならず。〔本尊阿彌陀〕〔割註〕座像御長一尺五寸、

作詳らかならず。〔脇士彌勒十一面觀音〕〔割註〕兩尊ともに座像御長八寸〇京都仁和寺に屬せり。

地藏院

〔割註〕同町にあり、社僧なり、開基詳かならず。〔本尊阿彌陀〕〔割註〕御長一尺五寸、作詳

かならず。

廢連乗坊

〔割註〕大西町のうへにありて大願寺の子院なりしといふ。

多寶塔

〔割註〕中西町岡上に建たり、方二間半餘、高さ八間餘二層なり。

本尊藥師如來（行基の作）

大永三年癸未六月にはじめて建立せりといふ。その後寶永三年丙戌に九輪の再興ありき。銘に嚴島御大工野阪太兵衛尉公春、同太郎作雅春、同小工豐島谷次郎。治工藝陽佐西郡廿日市住山田氏貞能

とあり。

廢多寶院〔割註〕多寶塔のかたはらにあり、もと塔の本寺なりしとぞ。』

陶全姜陣所〔割註〕多寶塔なり、毛利氏と合戦の時、陶まづ此所に陣をとりしとぞ。』

行宮趾〔割註〕高倉帝御幸の跡にして、即今の久保町竹林内侍が宅のあたりなりといふ。もこの

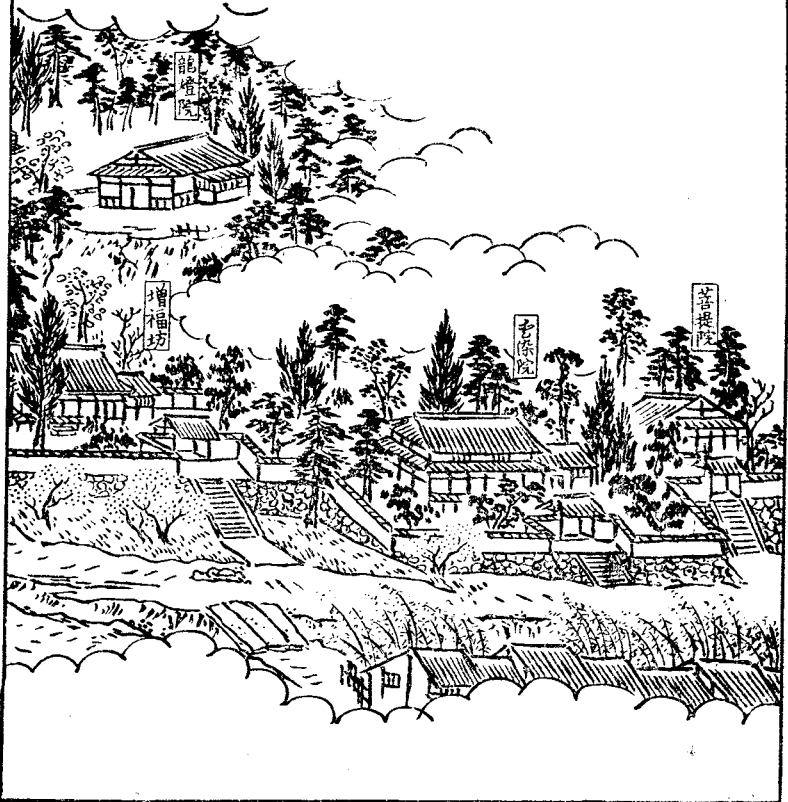
内侍は、宮武内侍といへり。このいへの内侍平相國に愛せられて女子を儲しこと、平家物語に見えたり。』

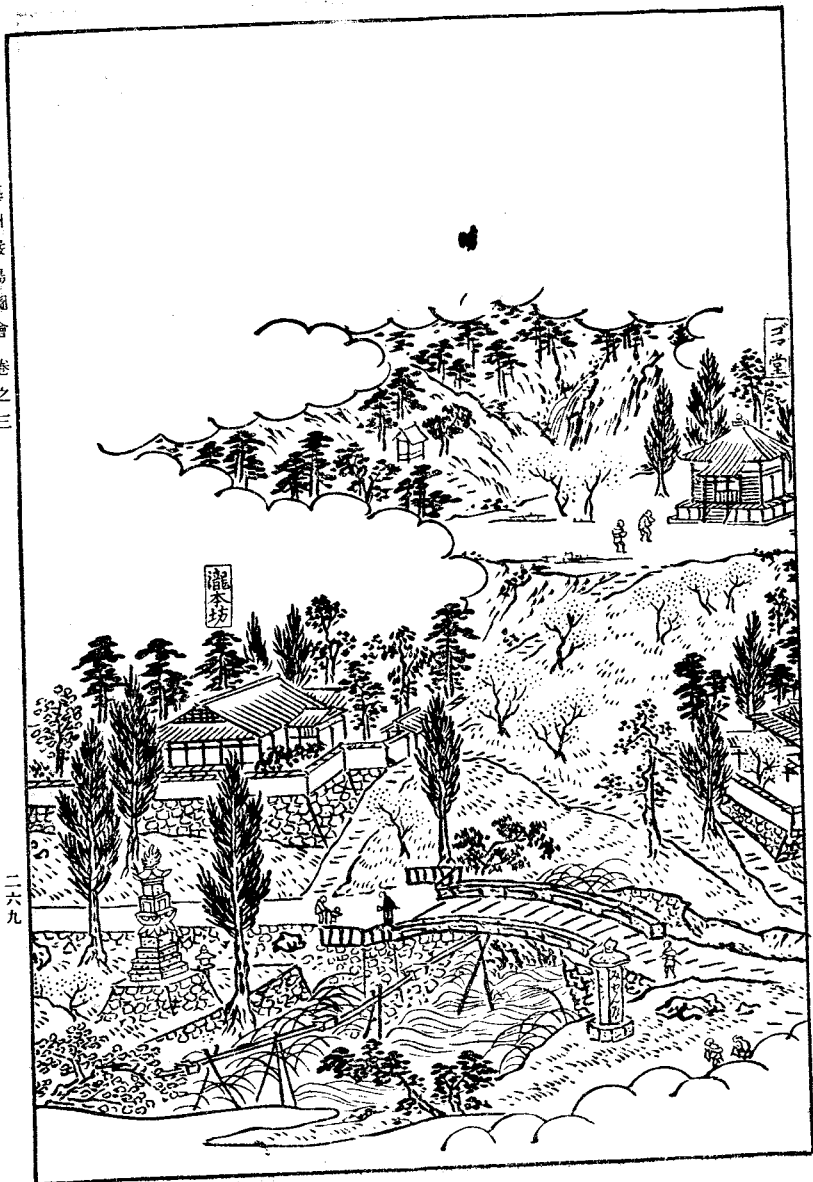
高倉天皇御幸記にいはく、宮じまの南のかた三げん四面の御所つくりて、障子の繪ども海のかたをぞかきたる。うみのうへなぎさまで廊どもつくりつゞけて、汐みたば御舟をさしよせん支度をぞしたる、云々。

大湯屋跡〔割註〕往昔南町にありて社家供僧潔齋の浴室なりしに、故ありて廢しぬ。その後また瀧町西方院のうへの山に再興ありしに、これも廢しぬ。』

俗傳にこの風呂再興の後、たま／＼魚を商へる者來りて浴せんことを請ひしに、素より凡俗の入ることをば禁ぜしかば、浴室守あへて許さざりしを、かの者ひまをぬすみて入りぬ。果して神靈の威験たちどころにありて、砌に植る椽樑中より折れて倒れ屋梁も推け、かのいりたりし者うち殺されにけり。これよりこの風呂もまた終に廢しぬとぞ、今大願寺の境内に一の鍔釜を遣せり。徑三尺七寸、深

社僧
菩提院
愛淙院
增福坊
龍燈院
龍本坊





其二

座主

大聖院





さ二尺七寸、また風呂の横立石といふあり。「割註」石とはいひ傳へたれど缺にてつくれるものなり。」横石には平清盛の三字、堅石には嚴島大風爐再興大江元就朝臣、同隆元、脇書に藤原元春、平隆景永祿七年三月吉日、一面に嚴島大願寺圓海上人建立、脇書棚守房顯、客人棚守親尊と銘せり。共に大願寺にあり。

南風爐趾

〔割註〕これも南町にありしを以て南風呂といふ。むかしは貴賤をきはらず浴せりとぞ。」

總て當島は山勢嵯峨たるを以て清泉多し。家ごとに笕を以て是をうけつぎ偏に擔波の煩ひなし。中にもこの南町におちくるみづは二丈餘の船にたゞへ。殊が中に清潔にして病痾をわすれしめしとぞ。寶曆のころより廢せりといふはあたらしきことなり。

廢瑞光寺

〔割註〕南町にありし。」

紅葉谷

〔割註〕南町の奥にあり。こゝに獅子岩とて名石あり。」

幽邃清閑にして澗水の音のみ潺々として石上を奔れり。岸の兩邊には欄樹多く。秋されば紅錦を曝すが如し。所の名實にそむかず。三伏の炎暑には青葉が蔭に假庇を設け、茶を煮餅をつくりて涼春を饗す。一區の勝地なり。

四宮

〔割註〕紅葉谷にあり。」

以中庵

〔割註〕同所にあり。光明院の抱地。」

若宮原

〔割註〕同所の奥三丁ばかりにして一區の原あり清淨の地なり。もと此原を若宮とよべるは

若宮と號る禰宇のむかしありしなるべし。

瀧山水精寺大聖院

〔割註〕瀧山の麓にあり。眞言宗天正中京都仁和寺に屬せり。

本尊不動〔作詳かならず〕辨財天女〔上に同じ〕客殿〔割註〕中尊彌勒、脇士弘法大師、毘沙門天。

護摩堂〔割註〕中尊不動、脇士辨財天、毘沙門天。鎮守二字〔割註〕秋葉大權現、住吉大明神、園

中にあり。正月九日連歌會〔割註〕當院に於て神人供僧相集てこれを行ふ、連歌始といふ。

當院は本宮の別當職にして世にこれを座主と稱す。中興は日輪上人法器の聞えたかき學匠にておはし

ましき。康正二年に武田國信佐西郡の神領を攻し日、神官僧侶廿日市の櫻尾の城に楯籠り防ぎ戦ひし

に、寇火城に罹りて書記多く焼失ぬ。されども灰燼の餘あまた残れるものもありしに、天文二十三年

後奈良天皇の勅覽の爲、記録什寶を一船に取乗せ都へ上りしに、圖らざる暴風に船を破られ、文書僧

俗ともに魚腹に満しめぬ。かく水火の兩災を経しかば典故の照し見るべきなく、寺傳たしかならざる

が故に、開基も詳らかに知られず、また座主といへるも古き稱にして、高倉天皇の御幸記に、座主阿

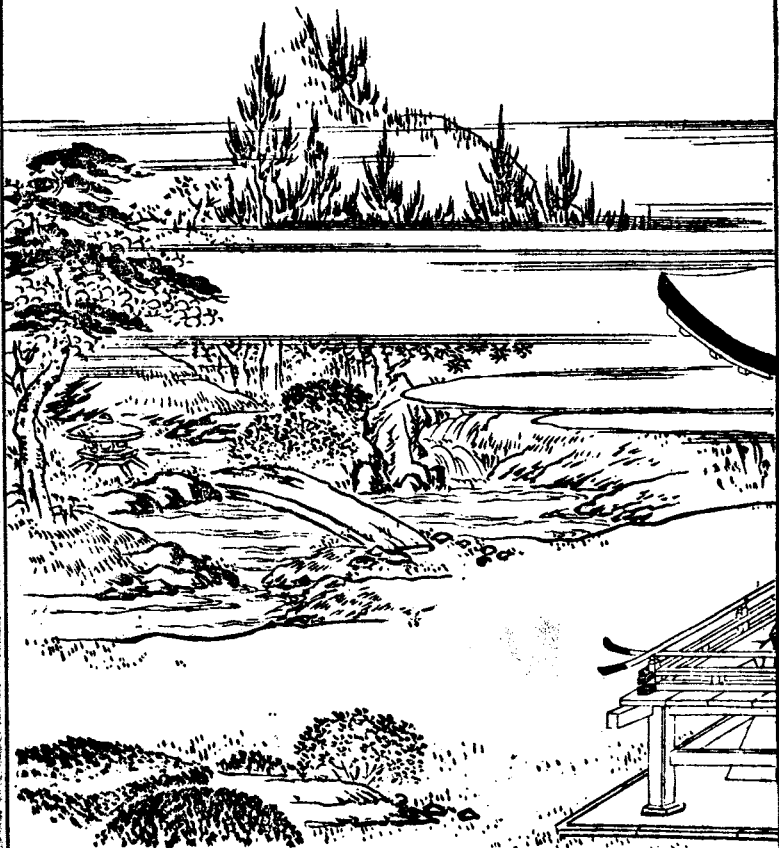
闍梨になしたまふとあるは、即ち治承の當職尊敎上人のことなり。大正中仁助法親王止住せさせたま

ひし故を以て、そのかみより仁和寺院家の任を世々にし、承仕二員使令に供するなり。

什寶

豊岡白大壁
院と折て和号
御會の園





兩部曼陀羅(弘法大師の筆下同じ) 五大尊 六字名號 合體不動愛染

弘法大師御影(眞如親王の御筆) 佛畫

當院は林泉閑雅にして頗る丘壑の情を養へり。豊臣關白御參詣のときも、和調の御會ありき。下に載たるを見るべし。

きよしより詠めにあかぬいつくしま見せばやと思ふ雲のうへびと	松
ことの葉もおよばぬ春の海山をきみがながめとなしておくらん	義近朝臣
軀のをの岩根の花を根ざしにて千代もくまなん瀧のしら波	信張朝臣
繪にもやは筆もおよばじ宮じまの浦と山とのはるのけしきは	頼隆朝臣
おもひきやこのしま山によりきつちり残りたる花を見んとは	秀康朝臣
たちよりしめぐみもふかき山櫻はなもや君が代をあふぐらん	瑤甫
山々のかすみのひまにちりてくる花かあらぬか見ゆるしらなみ	堯灝
おとにきくこのしま山をきてみれば宮居名だかき春のうなづら	法印定加
かたるともえやはつくさんなかゝにこのしま山の春のけしきを	釋全宗
みやこにてきしは物のかすならずこの浦やまの春のけしきは	法眼瑞慶
くるゝともいかでかへらむ島山のながめにあかぬ春のうなづら	禪高

うちかすむこのしま山のさくら花ながめにあかねはるの海面うらたうら

名もたかき浦の宮居みやいに来てみれば詠なめに残のこる山ざくらかな

浦やまのながめことなる春の日にながくしくも落おちる瀧波たきなみ

なにめでてこのしま山にきてみればかすみにおつる瀧のしら糸いと

神代かみよよりちぎりし松まつのふぢ波は下したゆく水もえやはたゝまし

おとにきくこの宮みやじまをながむればなほおもしろき春のうら山

行舟ゆくふねもきみがみゆきのをりをえて波もしづけきはるの宮島みやじま

春ごとのころしもたえぬ山ざくらよもぎがしまのこゝちこそすれ

見わたせば花はなさきにけりあけぼのやかすみにうかぶおきつしま山

をりにあひてさくやさくらの花ざかりいろもこゝろもふかき島山しまやま

花のころきみがみゆきの折ひをえてこのしま山の名なこそたかけれ

都人みやこひとにながめられつゝしま山の花のいろ香かも名こそたかけれ

名にきゝしみや島やまのさくらばな詠なめもふかき春はるの夕ゆふぐれ

名もたかき宮居みやいはるかにきてみればかすみのすゑのたきつしら波なみ

きゝしよりみてこそまされしま山のかすみにつゞく船ふねのかすく

長吉

盛月

忠重

正房

賢家

勝隆

長盛

三成

勝利

宗澄

吉種

吉繼

相阿

太一坊

休夢

いつの春たねをうゑけんしま山や松はこけむすいはほ成らん
瀧つ瀬の花に心もちとけてかへるさをしきなみの早ふね
祐 榮

宮じまのはるのけしきは君が代にかぜふかぬとや花もしるらん
正 家

うら山をかけてもすめる宮居かなながめたへなる春の夕ぐれ
正 勝

みや島の春やみゆきを待つらんけふひとしほの花のいろ香は
之 長

花のはるあきのみや島来てみればなほ一しほの月のゆふ暮
道 茂

ゆたかなる君が御代にもうまれきてけふ宮じまの花をこそみれ
友 阿

おそざくら心ありてや残るらん雲のうへなる人をまちつゝ
祐 庵

春風にながるゝ瀧のすゑすみて神のみやみのなほもたえまじ
久 阿

時をえて神のいがきにさく花のめぐみも露のかゝるのどけさ
元 清

巻頭の松とあるは即ち殿下の御事にて、御歌にかぎりていつも松とかゝせ給へり。長門國赤間關の阿彌陀寺にて平家追悼の御會ありし時の御歌にも松とあり、また此歌どもあるが中によるしきを撰びて擧げ、大かたは煩はしきに省きもやせんともおもひつれど、かく六々の數をみて奉納し給へるには故あるべしとて、みな載せつ。

○天正十八年八月廿五日當院にて

しまくもよせくる霧のまがきかな

紹 巴

なみに鴈なく月のあけぼの

良 政

こぎいづる秋の夜舟のかちとりて

昌 叱

○九州道の記曰、大聖院の良政發句所望ありて十三日一會あり、當社にかぐみの池といふあれば、

かげうつす月やかぐみの池のみづ

玄 旨 法 印

○長嘯子の記行に曰、下のくに安藝のいつくしまに詣て、ひとせつくしにくだりし時やどりける坊の主をたづね侍りければ、をともし身まかりぬと弟子なりける法師のかたりける。いまおもへばそのころ七十ばかりになん見えつる、をしむべきよはひならねど、またかへりとぬ道はいとかなしうなん。あひ見て物語などせしほどは、六とせにぞなりにける。何事もはかなき夢とのみなりはて、みなかへらぬむかしとなりけり。かの坊の泉水ころをつくし、草木などうゑおきたり。

なき人の手づからうゑしくさ木ゆゑ庭もまがきもむつまじきかな 長 嘯 子

と作みければ、みな人袖をなんぬらしける。その庭の内におのづからいとおほきなる石あり。苔むし物ふりたるうへに、いとおもしろき松ひとりたてり。つくりなさはこの外のことはさもありません。これにはいかならんたくみの人もえやはおよぶまじかりける。種しあれば岩にもとぞなが



西方院よ
あつて

夕月の

さすや

岩上より

麻のふゆし

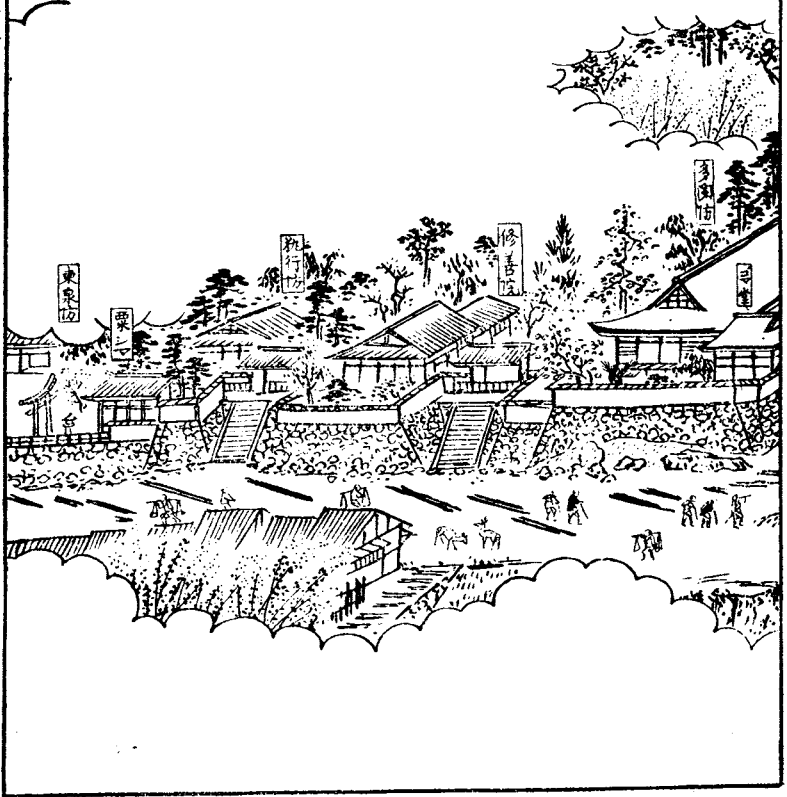
かろく

庭のま
れ

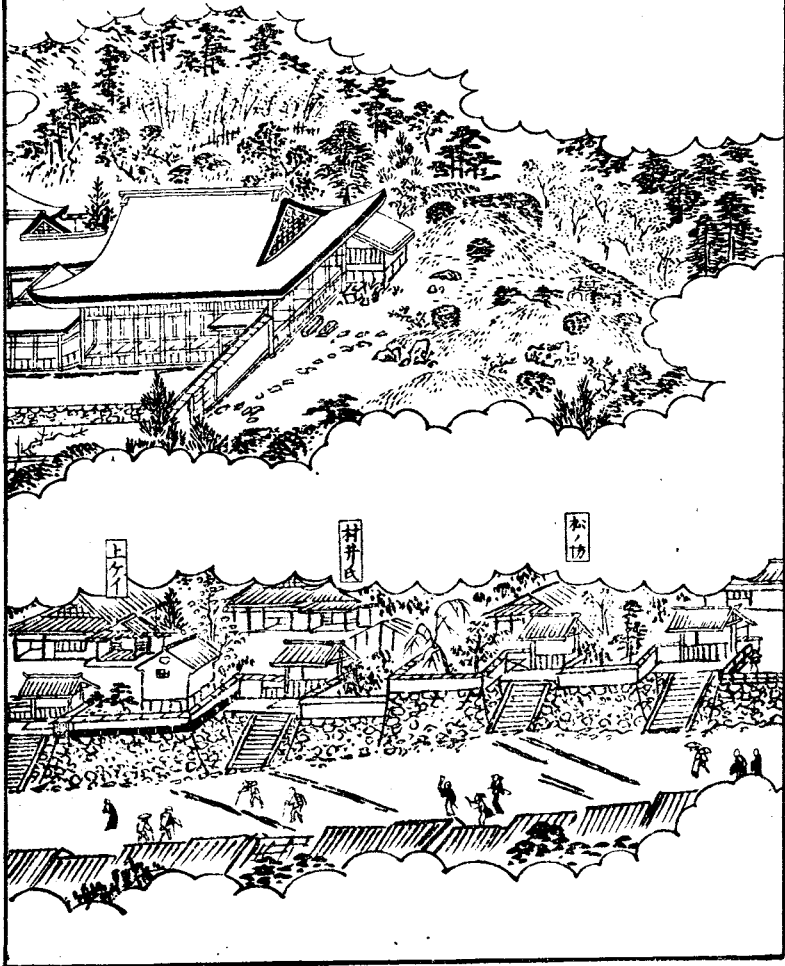
岡田清

社僧

西方院
修善院
執行坊
東泉坊
多聞坊



其二



訪桐守氏別墅
鹿孫居 岡田士亨

神州勝概已難描
况是林園幽事饒
松度三春增秀色
花紅匝雨逞芳嬌
豈辭綠酒憑詩酌
但笑青燈為老批
我亦何年與猿鹿
隨君此地伴山蕪



められし。

今按に、この文、ある坊とのみ記して寺號をいはずといへども、島内の林泉第一の住なるは當寺か西方院かのみ。兩寺のあひだ今決しがたしといへども、暫くこゝに引て後の考をまつ。

瀧本坊

〔割註〕大聖院の麓にあり、社僧なり、開基詳かならず。本尊十一面觀音(御長五寸七分)

脇土不動(御長三寸八分) 毘沙門天 〔割註〕御長三寸〇 天和年中に京師仁和寺の末派となれり。毛利

輝元卿などの書翰あまたを藏せり。

龍燈院

〔割註〕同所にあり、開基詳かならず。本尊不動(御長三尺、弘法大師の作)

脇土矜羯羅、制吒迦(共に御長一尺五寸)

相傳ていはく、當寺の本尊は弘法大師一刀三禮の御作にして、往時大同年中彌山に於て虚空藏求聞持脩法の時、一千座の護摩脩法ありき。故を以て自ら彫刻したまへるなり。靈驗今に不可思議なりといふ。

龍燈杉

〔割註〕同時にあり、往昔龍燈のあがりけるよしをいひ傳ふ。今はたえてなし、彌山にも龍燈杉あり、四の巻にいへり。

増福坊

〔割註〕中西町にあり、天和年中に京師仁和寺に屬す。開基詳かならず。

本尊不動(御長一尺一寸)

愛染院

〔割註〕増福坊に同じ、社僧なり以下みなしかり。』本尊不動〔割註〕御長一尺一寸〇天和年中京師仁和寺に屬す、開基詳かならず。』

影向石

〔割註〕愛染堂の前にあり、本尊の明王この石に影向したまふといふ。』

菩提院

〔同上〕本尊不動〔御長一尺二寸二分〕脇士矜羯羅、制吒迦〔共に御長六寸四分〕

當寺は兩宮の常夜燈および常香を掌る、昔毛利氏より常燈料を寄せらるゝの書翰あり。

西方院

〔割註〕瀧町にあり、開基詳かならず、中興元宥上人。』本尊不動〔御長七寸〕脇士矜羯羅、制

吒迦〔共に御長七寸〕

什寶 古法眼畫屏風 土佐光起畫 同光成畫

當寺いにしへは東坊と稱せり。天正年中仁和寺の御室仁助法親王この島に御止住ありし故を以て、西方院家の號を賜ひて御門下に准ぜられき。抑々仁助法親王とまうしたてまつるは、伏見宮貞敦親王の御子におはしまして後奈良天皇の御猶子なりき。竹の園生におひたまはしければ、佛門に入らせたまひたりとて、何のあかぬことなき御身なれど、御法流御再興の御志願ふかくおはしましゝにより、斗蓋行脚の墨染に御衣をやつし給ひ、玉敷の都をあくがれて西國のかたに御下向ありしに、當島大聖院良辨の遺弟良政幼して法務に堪へざりしかば、示諭教授の御爲につひに此島に御留錫なしたまひけり。世こそぞりて嚴島の御室と稱し率りき。然るにいかんともしがたきは、無常轉移の世の



瀧の薬師



ならひ、たゞ假初の御違例と見えしに、日を逐て怠らせたまふ御氣色なれば、大聖院は釋門ながらも死穢を忌むこと神人にひとしければ、遽に御病牀を當院へかへ奉りて、わづかに一日二日へて夕の露ときえうせたまひぬ。即ち御遺體をば赤崎といふ所に掩葬し奉りぬ。今もその地を御室山とよぶなるはこの故となん。○大元社（境内に勧請す）

當院の林泉は雪舟の作にしてはなはだ古雅なり。加賀の三千風といふもの、記をつくりて稱贊せり。その文今略す。

多聞坊

〔割註〕瀧町にあり、開基詳かならず、中興は永意。本尊毘沙門。〔割註〕御長三尺四寸、弘

法大師の作。脇土不動、十一面觀音。〔割註〕各御長二尺六寸五分○當坊は彌山の本願なり、天和

年中仁和寺に屬す。

修善院

〔同上〕本尊釋迦。〔割註〕御長一尺七寸○この坊に權律師增辨補職の狀吉川元春の書翰など

の古文書あり。

執行坊

〔同上〕本尊不動（御長一尺二寸）

東泉坊

〔同上瑠璃山と號す〕本尊藥師（御長三寸、春日作）脇土十二神將（御長各一寸六分、同作）

○鎮守粟島大明神社（境内にあり）

什寶

具利迦羅不動一幅。〔割註〕弘法大師筆○外に毛利家より寺領寄附の狀等あまた藏せり。

松坊（上におなじ） 本尊阿彌陀〔割註〕御長一尺一寸、安阿彌の作。 駒土觀音、勢至（御長各六寸）

長樂寺（上に同じ） 本尊日輪觀音（御長六寸四分）

荒神堂（瀧町の山にあり）

瀧薬師堂（同所）

棚守將監屋敷（同所）

當家は 大宮の棚守職にして舞方を兼司り、往々從五位下に叙せることありき。本の氏は佐伯にて苗字を野阪と呼けるに、いつのころよりかその職名を用ひける、即ち遠祖は大宮を齎き奉れる佐伯鞍職なれば、實に瓜蔓連綿たる系譜なり。年中の雜掌多き中にも、殊に六月二日管絃講といふは、神人氏人等を相集め宴をなす。座に連なる者およそ千有餘人、終日酣暢す、いみじき盛會なり。（割註）相傳ふ、この島に丸山九太夫といふ者ありけり、射術に妙を得たりしかば、鎌倉右大將の富士の狩にめされて、惣勢の中より善射の人を精撰して僅に七十人を得たりしに、この九太夫また信濃國八幡の神主の家人丸山助太夫といふ者と二人員のうちなりけり。然るに足利の澤邊三九郎といふ者、兩丸山はみな社家の下人なれば侍の中に入るべからずといひけれども、那須與市、宍戸四郎が撰なればとてそのまゝなりしに、當時獲物のかず助太夫第一にて猪、鹿三百頭、第二丸山九太夫百八十頭、澤邊はたゞ六十四頭を射留て七十人の中の下第にてぞありける。これによりて人々うた作てうたひけらく

中江禁師
しやんせいのやくし



丸山のみねのあらしのはげしくて澤邊の鹿のいられざりけり

云々。これ全く俗傳にて正史の載するところにあらずといへども、記して看官の考をまつ。この丸山社家の下人といへるを以てみれば、棚守家の臣なりしか。」

九州道の記（七月の件）にはく、十四日にも棚守連歌興行すべきよしあれども、魂まつる日にあたれり。こゝろづきなきやうにやあるべきとて辭退しけるに、さらば發句ばかりをと所望なり。おもひかけずほとゝぎすのなきければ

秋やまだ葉やましげ山ほとゝぎす

玄旨法印

かやうに申つかはしける。さらば晩に饗すべきよしあれば行けるに、いろ／＼の肴もとめて盃いだされて、子息少輔三郎出座ありて亂舞あり。脇差を出してまかりかへりし、云々。

弘中戦地（瀧町にあり）

陰徳太平記曰（上略）弘中三河守 同中務少輔は、本社の後なる觀音堂の邊より入道に引別れ、瀧小路を後にあて、五百餘騎を二段に備へ、追來る敵を侍かけたる所に、一番に吉川治部少輔元春追懸たまひけるを見て、弘中父子も來戦死と思定めしことなれば、何の會釋もなく、幕直に打てかゝる。吉川の先陣突立られて十四五間引退きければ、元春こはいかにとて自ら鎧を以て扣きたてゝかゝり給ふ。弘中父子も能敵なりと目に懸て味方をいさめ、鎧を提げ突合たり。これを見て吉川勢宮庄、今

田、粟屋、境、朝枝、森脇の者共命を塵芥よりも輕じて切り入ける故。弘中父子突立られ瀧小路へ引退くを、元春つゞいてすゝみ給ふ。かゝる所に柳小路より青景彦九郎、波多野彈正忠、町野左衛門大夫、尾和兵庫頭等三百ばかり横合に突てかゝり、吉川勢危く見えしが、熊谷伊豆守、天野紀伊守おくれ馳に來り渡り合て戰ける間、弘中青景已下終に押立られて進み得ず。弘中はさる古兵なりければ、瀧小路の左右の家に火をかけ、その粉れに引にけり。元春は弘中をば遁すとも苦しからじ、神殿を燒すなどて。敵には目もかけず此火を消されける隙に、弘中は大聖院のうへまで引退て暫らく控へ、合戰の成行果を窺て、息繼でこそ居たりけれ。

中江薬師〔割註〕中江町にあり。』

若宮〔割註〕同所勝谷某が屋敷地にあり。傳へいふ、陶全姜の靈祟りをなすによりて、後に此所にその靈をまつり、かつ毛利兩川の三將をもともに齋ひこめたりとぞ。神威灼然社内の物とだにいへば、

塵芥のいさゝかなるも取ればかならず祟あり。』

牛王社〔同上〕祭神猿田彦大神。

廢永元寺〔割註〕中江町の奥にあり。』

嚴島圖會卷之三終



瀧の薬師

